

F・W・J・シェリング

絶対的な同一性―体系、ならびにそれと最近の

(ラインホルト流の) 二元論との関係について

著者とひとりの友人との間で交わされたある会話

栗原 隆 訳

F.W.J.Schelling

**Ueber das absolute Identität-System
und sein Verhältnis zu dem neuesten (Reinholdischen)
Dualismus.**

Ein Gespräch zwischen dem Verfasser und einem Freund.

in : Georg Wilhelm Friedrich Hegel : Gesammelte Werke.
Bd. 4 (Felix Meiner)

絶対的な同一性—体系、ならびにそれと最近の
(ラインホルト流の)二元論との関係について
著者とひとりの友人との間で交わされたある会話

著者：…いつたい、ここであなたは何をしてるんだい？ それに、どうしてそんなにただならぬ様子で笑っているんだ？

友人：ほら見てご覧、ラインホルトの『哲学をいつそう容易に展望するための寄稿』なんだけど、おかしいのさ、その第三部にあなたについてのある発見、というのが出てくるわけさ。

著者：それだけ？ 教えてよ、ラインホルトが発見したって？

友人：もちろん、しかも、あなたがラインホルトの師匠の発見的諸原理 (heuristic Prinzipien) という教義を利用していているんだって。そして、見かけたところ、あなたは知りもしないし、望んでもいないのに、同時に、彼(つまりラインホルト)と一緒にあって、あなたが不合理性そのものと呼んでいたものを見習っていた、というような発見なのさ。見てごらん、この一七一頁にその箇所(*)があるよ。

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 170 f. —ラインホルト『哲学をいつそう容易に展望するための寄稿』(以下『寄稿』と略記) 第三分冊 一七〇頁以下

「バルデイリの体系にあつては、絶対的同一性は存在でも根元存在でもなく、思惟としての思惟の性格

絶対的な同一性—体系、ならびにそれと最近の(ラインホルト流の)二元論との関係について

となるが、シェリングの体系では根元存在なのである」。

「絶対的同一性が、『バルデイリとシェリング』両者の体系において、用いられている意味や精神がこうして全体的に違っていても、この絶対的同一性を用いた叙述に即して、多くの点で非常に似ていることが目立つ。そこで人は、発見的原理であるバルデイリの学説を、シェリングがその絶対的な同一性体系を構想するにあつて利用していると、したがつて、見かけたところ、それそのものを知つてもいなければ望んでもいないのに、同時に、彼が不合理性そのものと呼ぶところのものを、私とともに見習つていたのだ、と見なさざるを得ない」(S.171f.)。

F.W.J.Schelling : Werke. Bd. III. hrsg.v. M.Schröter. —シェリング『我が哲学体系の叙述』シュレーター版全集第三卷「彼(ラインホルト)は、自己自身を学ぶことに運命付けている。そしてそれどころか、不合理性そのものさえも見習つている。その意味では、彼は実際に正当なことを行なつていたのである」(S.7)。

著者：本当だ、そうすると、その箇所がどこにあるのか、またそれが何に対する答えなのか、すぐに分からないよ
うだったら、それをまったく独創的な工夫だつて褒め称えることになつたかもしれないね。それにしても、それは、
それ自体ばかりかばかしいことを別にしても、ひどくありきたりの卑劣な報復ですね。

友人：まったく、僕はあなたの最近の『我が哲学体系の叙述』への序文の言明を思い出しましたよ。

著者：まったくそうなんだ。そこで私は、こう書いているよね。「こうして公式的には、ラインホルトに許されて
いるはずのことは、彼にとって好きなようなものを、批評とか雑誌とかで、私の主張だとすることではあるが、そ

の他にも、発見的原理である私の理念や方法を用いること、このことは（と私は付け加えているよね）非常に役立つはずである。それどころか、超越論的観念論そのものから由来していながらも、彼の頭への移行過程において不合理にされた理念で観念論と闘うこと、こうしたことが許されているはずである」（八頁）だって。【130】

友人：ご覧のように、ラインホルトは、あなたの許しをすぐにも役立たせた、というわけさ。そして許可を得たもんだから、直ちに、理念を発見的原理として使い始めたわけだね。

著者：ラインホルト自身、かねてより、私の超越論的観念論についての批評の掉尾で、発見的原理としての私の体系が有効に役立つだろうと説明する必要を認めていた（*）ということを見逃して欲しくないもんだ。彼がかつて言っていたことと、ここで言っていることとは、同じことなんだよ。ただ表現が、彼にとつて、逆になつてしまつただけなんだろうね。当時はまだ身の程を弁えていたのに、それ以来、見るところ、彼の学派において傲慢たることも学んだようだね。ラインホルトの表現の素朴さ（*Naivete*）や、私がかんげいに甘んじるであろうというラインホルトへのお人好しの信頼なんてものを、私は、引き合いに出された許しを出すことによつて応えるということでは信じられなかつたんだ。

（*）ラインホルト「シェリングの『超越論的観念論』についての批評」（『一般文芸新聞』一八〇〇年八月一三日）

「シェリング氏は、彼の『超越論的観念論』を通して、真理を作る弁証法的な技術の傑作を供していた。——つまり、位置にして同一の精神の所産における思索と詩作との融合という、へ無〜プラスへ超——アテネの神殿が自らを表現しているように、超越論的観念論都言う新しい宗教を構成するべき相互浸透しあう哲学と詩情のための真なる機関——そして結局は、哲学における観念論の完全な昇華を供していたの

である。哲学は、疑うべくもなく観念論が根本的に沈殿する諸条件の一つであつて、この沈殿によつて真なる哲学にとつてのみ、真なる機関は、發見的手段としてうまく行くことができるし、うまくゆくことである。」

友人：でも、十分に気を付けてくださいよ。彼は、例の言表で、あなたについて一言も引用していないんですよ。

著者：ますます良いつてもんかな、そのほうが、いわば分別のかけらがすっかり分かるんじゃない。

友人：だけど友よ、少なくとも、あなたはあの序文における所見のように、短く、ただ次いでに記した注記でもつて済ますわけにはゆかないつてこと、結局は、こういった連中の押し付けがましさととの關係を終わりにして、それらの根幹を攻撃することに心を決めなければならぬだろうつてことを、お分かりですよ。そうでないなら、せめて、あなたが論敵に対して余りにも無関心で、またあなた自身の事柄にも無関心すぎるとつてことを分かつて下さい。

著者：親愛なる友よ、論敵や反対者を持つつてつてことは、この時代では名譽となり、また私にとつては、善きことにも属する事柄かなと思われます。だけど、このラインホルトは、私にとつて昔から退屈なヤツでして、彼に親しむにせよ、彼を私の反対者に数えるにせよ、常に自制を要したものでした。さて、なるほどラインホルトが、「バルデイリと」精神的な結婚をして、その中で自ら言っているように、純粹な受容に自己限定して以来（*）正直申し上げますと、叙述するにはいつそう面白い対象になりましたので、私は、ラインホルトにやる氣と時間とを振り向けることを二度としない、などと誓つたりするものではありません。彼を反駁したり、彼から自分を弁護したりすることは、まだ必要ないと思つていたのです。

(*) ラインホルト『哲学をいつそう容易に展望するための寄稿』第一分冊

「しかし、私が不幸な合流の試みをさらに進める前に、私の良き守護神は、私をもう一度、学兄の『第一論理学綱要』の学派へと連れ戻したのでした。そして改めて私は、真剣に学兄の学派において純粹に学ぶことに自己限定したのでした。それによって私は、結局、私の甘やかされた構想力を抑えつけ、古い超越論的なタイプの哲学を、新しい合理主義的なタイプの哲学によって、最終的に私の頭から放逐したのであります。／学兄の哲学について思弁するにあたって、学兄の哲学によって私の従来への似非知をほうくするのではなく、いわば学兄の哲学を、私の似非知によって誤解しないように気遣うべき原因は挙げて私にあります。こうした障碍を前にした不安から、私は、学兄の哲学に私従事することを、学ぶことに、すなわち最も本来の悟性に老いてより純粹に受容し、追思惟することに限定した次第です」(一六三頁)。

友人：今後も、ラインホルト流のいわゆる体系への批判などに、あなたは手を染めるべきではないでしょう。それには、あなたの根本命題を学び知るだけで十分ですのに。だって、あなたの根本命題を把握して、ラインホルトの体系を知っている人なら誰も、ラインホルトの体系がその前面に動物のしるしを掲げで、そしてその内面的な性質や本質からいっても、極めて粗雑な種類の二元論として、それ以上の評価を必要としないからです。ドイツ世界は、まだ批判者達に恵まれていないというわけでもありませんから、ラインホルトに、必要な【131】権利など認められるべきではなかったのです。ラインホルトへの批判のためには、ヴェルツブルクどころか、チュービンゲンの学者達の報告でさえ完璧に十分というものです。ラインホルト自身に関しては、彼は、人がそこから始めることだけはできたような理念に余りに深く囚われた結果、そうした評価が分からなくなっているのです。こうした精

絶対的な同一性―体系、ならびにそれと最近の(ラインホルト流の)二元論との関係について

精神的な奴隷状態は、彼がこれまでも経てきたまた別の精神的な奴隷状態のどれとも同じように、彼に、何事かを分
からせることが期待できるようになるまで、一定期間持続するに違いありません。ラインホルトは、それをやめる
ようになるまで、いつもただ無意味の極端にして頂点を目指していなければなりません。ラインホルトの行な
つてきたことに関しては、彼は、はばかることなく、何をやっても構わないという利点を持っています。だって、
彼には最早、失うものは何もないからです。とはいえ、評価され得るようなことではない事柄でも、少なくとも特
徴付けることはできます。

著者：私も同意見だよ。ただ、私の意見には、自己自身を特徴付ける時間が必要だけれどね。この手の被限定性（こ
だわり）が心配している密やかな恐れ、つまり無の感情は、そのこだわりを結局、間違ひなく混乱させて、陰気さ
そのものからして、自らの紆余曲折を楽しむように強いたりするもんですよ。私の格率は、そうしたどんな場合で
も、事柄をできるだけ簡単に片付けることができるように、最高の爆発の瞬間を待たなければならぬ、というこ
となんだ。

友人：その瞬間を、あなたは、ラインホルトに関しても、実際に待つてきた、というわけですね。するとまさにこ
の点であなたは、僕の判断に任せるのが、いちばん手っ取り早いように思われます。というのも、こうしたお芝居
に、僕自身関与することなど、また僕が誰かに近づいたり、誰かが僕に近づいたりすることがあるような立場を占
めることなど、僕には思いも寄らないことだからです。それにもかかわらず、あなたが黙ったままで、周知のよう
に軽視しているものだから、ラインホルトという気の弱い男に匹夫の勇を奮わせているんだ、と言うことができる
程度に、事柄と人格とへの歴史記述的な知見を持ち合わせているのは、ラインホルトという対象へ僕が関心を抱い
ているからなんだ。この気弱な男は、あなたも見ているように、まさに称賛されることのないままに今まで用いら

れてきた手立てでもって、もはや自己限定するどころか、新たな分野へと移っています。この新たな分野のでっち上げは、たとえその出自からしていかさまなものであっても、必ずや矛盾して彼にとって進めば進むほど駄目になるものであっても、あなたにとっては、ラインホルトを今後、より厳しく監視しなければならぬということを示すものではあるんだよ。

著者：落ち着いて、親愛なる友よ。必要なことは出来るでしょう。私は、この新たな転回について、まだ別のことも見込まれると思うのです。ラインホルトは、彼の体系の幾つかの突出した尖端さえも、我々には廃棄することだけが許されている者（バルデイリ）の手に委ねざるを得ないでしょう。その陰には、ちゃんとしたもの（根元哲学）が隠されていて、これがしばしば引き出されるたびに、これをラインホルトは繰り返しきちんと隠してしまおうとしたり、何も知らないそぶりをしたりするわけですが、そうしたかくれてあるものを、我々は明らかにすることが出来るでしょう。彼は、我々の手間を省いてくれているのです。我々には、彼が舌禍で「学者」生命を失うということ、彼に確信させさえすればいいのです。私の察するところでは、論証にあっても、そのあふれるばかりの舞台裏にあるのは、楽しみでしょう。だけど論件を確認するためにも、我々がもっと進む前に、彼の発見というのがどのような事情なのか、私にもっと正確に教えてください。【22】

友人：そうですね、ラインホルトにとって最初の衝撃であったのは、新たな『我が哲学体系の叙述』でした。しかし、これで十分だとあなたが考えているのだったら、まったくの間違いですよ、親愛なる友よ。だって、あなたの雑誌の最近号で叙述されているような、あなたの体系というものが、とりわけラインホルトが今、哲学だと称しているものとは折り合いが悪く、それも、そうした哲学に常に対立するに違いない、ということくらい、たとえ序文において彼についてほんの少し都合の悪いことを表現しただけでも、彼なら他人の助けがなくても分かったでし

ようし、ある程度は判断できていたでしょうから。だけど、『エアランゲン文芸新聞』に、ある批評家が現われていなかったなら、ラインホルトが本来の対立点を見抜いて、それを曖昧な感情以上のものにまでもたらすには、長い時間がかかったことでしょう。『エアランゲン文芸新聞』の批評家が、幸か不幸か、ラインホルトの蒙を啓いてやったのも、批評家は、先の『叙述』で際立たされた主要な論点を、ラインホルトの咎となる近世哲学が犯した信じがたい誤解、歪曲、曲解というものに対置するとともに、ラインホルト自身の学説に対置しましたことよつてでした。そのやり方も、確かに、シェリングとラインホルトの両者が正反対の位置にすることを明らかにしたのですが、ラインホルトの学説が哀れなほどに裸で単純なことも、白日の下に晒されたのです。

著者：あなたはその批評家を知っているの？ 彼の仕事は、学問に対する貢献のように私には思えるけれど。

友人：ぜんぜん知りません。だけどラインホルトは、あなたがその批評家を知っていると、そして、彼があなたの友人や弟子筋にあたると、ラインホルトの表現によれば、あなたの「秘教的 (esoterisch)」な学派に属していると、断言していますよ。

著者：はつきり言っておくけど、彼がどういう人物なのか、私はまったく知らないんだ。それに私の知るところでは、そんなことに言われているすべてが本当のことではない。それに、批評家も、すべてが私の意を汲んでいるとは思えないしね。

友人：そうやって追従をあえてするような人たちであつたなら、それによつて自分たちの論敵が教養ある新聞（*）の編集者たちに対して与えていた生々しい心痛でさえも、これを利用して、自分たちの事柄を称賛する批評文を教養ある新聞に持ち込むためには、手段を選ばないという人たちですよ。

（*）『寄稿』第一分冊で、ラインホルトはバルディリに宛てて、次のように書いている。「先週、私はイエー

ナに『第一論理学綱要』の批評を送りました。もつと良いものを提出できるように、もつと時間をかけたかったのですが、他の教養ある新聞に、ご著書を悪く言い立てる一方で、公衆の反感を煽る批評が、私の批評に先んじるかもしれないということを慮れたのでした」(Beiträge. H. 1. S. 164)。

著者：そんなことやったって無駄なことだよ。もつと教えて。

友人：さて、思いがけない批評が、それも遠まわしに言えば、あなたの体系についての意外な叙述が学説体系のなかに亀裂を引き起こしたわけで、そこから素早く材料を借りてきて出来た「合理的事在論の諸境地の新たな叙述」(『寄稿』第三分冊第三章)によって、その亀裂が新たに粉飾を施されて、先の批評によって明らかにされた美しい学説部分が隠蔽されて、またしても一時的に穿り返されてしまったわけです。ですから、こうした筋違いや横車のすべてを、分かってください。そんなものは、まともな効果を挙げないまま、ただ短い猶予期間しか与えられないということを経験では気付いていたのです。そこで、世の人々が混乱に陥り、細やかな骨折りが気付かれないままかもしれないという不安に駆られて、最初にむしろ先駆けをしたいという思想になったのでしようし、それから、あなたにこれから話す更なるお仕置きを促すことになるつもりです。あなたは、あなたの体系の最近の叙述で、今度こそ体系をきちんとしましたよね。ラインホルトはそれを、彼の『寄稿』の最近刊行された冊子で、いろんな方法で、その体系の配置を動かして、形を崩そうと試みていたのです。ラインホルトは右に左に圧迫感を感じていたのです、差し当たりあなたの体系を、いつもそう見てきて慣れていた状態にもう一度戻して、そうやって自らその体系の創始者になろうとしたのに違いありません(*)。

(*) C.L.Reinhold : Beiträge. H. 3. S. 163-168 — ラインホルト『寄稿』第三分冊、第四章「絶対的な同一性

体系もしくはシェリング氏の最新の純粹な合理主義、ならびにそれと合理的實在論との關係について」

「周知のように、シェリング氏は最近になつても、哲学全体を二つの基礎學に還元している。つまり、思弁的自然學と超越論哲學とに還元しているのであつて、シェリング氏は一方を、彼の『自然哲學の體系構想』（二七九九年、イエーナ）にて、他方を、彼の『超越論的觀念論の體系』において樹立していた。

そしてそれらについて、シェリング氏は、『超越論的觀念論の體系』への序文で、『双方は決して一へと移行し得ない、永遠に対置されているものでなければならぬ』と断言していた。少し前にフイヒテ氏は、哲学全体を、かの二つの學の一方に、つまり超越論的觀念論に還元して、これを哲学唯一の可能な學だと言明していたのであつた。そして自然學の立場では、理性が、へ絶対的なものとしての世界の存在に立ちとどまつていることを強いられていた、とフイヒテは主張していたのであるが、フイヒテ氏は、この立場を、ただ通俗的で哲學的でない立場だとして認め、これに、唯一哲學的な立場である超越論的な立場を對置したのであつた。

なるほど、シェリング氏は、上述の序文で、『二つの學がまったく同等の實在性を持つてゐることの説得力ある証明』を、著書そのものにおいて行なつたと断言している。しかし、彼ははつきりと付け加えてゐる。つまり、彼は、先の同等の實在性を、『理論を顧慮して、そこまでただ主張していた』のであつて、彼はその証明を、ただ理論を顧慮するためにのみ、企ててゐるのである。『單に理論的な考察のために』と彼は言う。『最初に客觀的なものをするのか、それとも主觀的なものをするのかということは、どちらでも構わない。』『主觀的なものに、すなわち、初めに主觀的なものだけを人は爲し得るといふことに賛成できるのは、ただ実践哲學だけであるが、これは理論的な考察においては発言権を持っていない。』

しかし、周知のように、主観的なものを最初にする観念論においては、およそ理論的なものと実践的なものとの間の一切の実在的な区別は完全に崩壊している。シェリング氏自身、『哲学雑誌』第二分冊第七章Bで、我々に次のように言っている。『フイヒテは、より高次の哲学と呼ばれて間違いない正当な哲学の創始者である。というのも哲学は、理論的だけでなく、実践的だけでもなく、同時に理論的にして実践的だからである。』このフイヒテ哲学は、徹頭徹尾知る行為に他ならず、また行為する知なのである。その哲学にとつては、端的に、知である行為と行為である知との実在性しか存在しない。行為でない知と知でない行為との間の一切の区別は、この哲学にとつては、もっぱら単に経験的な、その言うところの通常の意識の立場に帰属するものである。このような意識の立場の上で、そしてこうした立場にとつてのみ、認識と意欲との間の実在的な区別は存在しない。そして認識は、経験的な知と実践的な信仰へと崩れる。この実践的な信仰は、現実生活の経験的行為にあつてのみ、そして経験的な立場で、同時に経験的な知とともに、そして経験的な知と並んで姿を現わすことが出来るが、こうした信仰においてこそ——行為する知と知る行為そのものが崩壊する。そうなると、純粹自我そのものは、必然的に無視される。そして経験的な自我にとつては、意識された活動性と、没意識的な活動性との間の調和の絶対的な根拠として——超越論的観念論の神である道德的世界として現われるのである。

しかしながら、超越論哲学にとつては、理論的なものと実践的なものとの間の実在的な区別が何もないなら、またこうした区別が経験的な立場でのみ、そして経験的な立場を顧慮してのみ、この哲学に通用するのなら、思弁的自然学と超越論哲学とが同等の実在性を持つことへのシェリング氏の証明もまた、これが理論的な考察においてのみ営まれているからこそ、経験的な立場にとつてのみ、そして経験的な顧慮に

おいて有効たり得るだけなのである。しかし、たとえ哲学の基礎額が同等の实在性を持つているということが、哲学に対して単なる経験的な妥当性など持つことができず、またもつ必要などないということにならば疑念を差し挟み得ないとしても、シェリング氏が彼の二つの基礎学の大いなる謎を、彼の理論的な証明によって、むしろ初めて謎として樹てたに過ぎず、決して解決したのではなかったということは明らかである。

『思弁的自然学雑誌』第二巻第二分冊は、この解決をもたらししていた。そこでシェリング氏は、またもやまったく新しい学を樹立している。それは、先の二つの基礎学の基礎学であつて、超越論的観念論でも、思弁的自然学でもなく、同時に双方である学なのである。そして、そうした学においてシェリング氏は、フイヒテ氏のもつと高次の哲学を超えて、至高にして最も深遠な哲学へと抜け出てゆく。シェリング氏は序文で、彼の謙虚さのままに述べているように、そうした学を唯一のものと思はず気負いを持っているという。従来、彼がただ理論的な顧慮においてのみ、主張して証明していたことは、こうした絶対的な学において、絶対的な顧慮において、自ずからあきらかになるという。つまり、知性としての自然と、自然としての知性との絶対的に同等な实在性である。それを明らかにする知は、単に理論的だけでなく、同時に実践的であり、むしろ超越論的にして同時に自然的・思弁的であつて——一言で言うなら、徹底的に絶対的であつて、そして絶対的な同一性体系の名の下で樹立されているのである。

これまでシェリング氏は、一にして同一の哲学を、二つのまったく違った徹頭徹尾同じでない目で見ている。それについて彼は、一方をフイヒテから、他方をスピノザから借りてきていたのである。二つの相互に対置され合う形態のもとで、シェリング氏は、先のような目によって、こうしたものとしての真理を

見ていたのであるが、それらの形態は、一にして同一の真理に他ならないということ、沿い下ことを見る
ことが出来たのは、先の目のそれぞれ独自のものによってではなく、さりとして、それら双方の目によって
同時に、でもない。——そのことは、知られるのではなく、ただ信じられただけでしかなく、ちょうど、
超越論哲学においても、一切のただ理論的な知が、そしてその限りでただ経験的な知が、実際のところ、
単なるへ信じることゝでしかないようなものである。先の二つの目には、なお、眼鏡が付け加わらなければ
ならなかった。その眼鏡を介して、先の形態の必然的にして永遠の相違性は、純粹な同一性へと解消し
たのであって、シェリング氏は、そうした同一性を十分にうまく、彼の新たな『哲学体系の叙述』の冒頭
にて、読者達に突きつけることが出来たのである。

シェリング氏が予め注記していたように、その体系は、多年、シェリングによって試みられた二つの側
面からの哲学の叙述を、シェリングにとって基礎付けたものである、と。そしてシェリング氏は、その体
系を、今まで、ただ個々独立的に所有していただけで、おそらく僅かな人たちとしか分かち持っていなか
った。——（そうした連中の一人が、『エアランゲン文芸新聞』において私の『寄稿』第一分冊について
批評した批評家である）——などと、はつきりだんげんしていなかったなら、しかも、そこからその体系
は、少なくともその基本線においては、一七九九年のミカエル祭に、バルデイリの『第一論理学綱要』が
刊行された時、既に構想されていた、などと結論づけられていなかったのなら、この『綱要』を表面だけ
でなく良く知っている人なら、シェリング氏が先の眼鏡を、バルデイリによって作ってもらったと見なし
たくなっただらう。（原注）

（原注）私自身によって学ぶことを運命付けられたところか、不合理性さえも見習っていると、シェリン

グ氏は「まえがき」で私について言っているように、私は、目と眼鏡の言い回しをも学んだのであった。それもシェリング氏自身の学派のある芸術家から。フリードリッヒ・シュレーゲル氏が、『特性と批判』第一巻にて、しかも、そこでくず鉄と同じくらいに意味深いと称されている、あの『独自の思想もしくは断片的な森羅万象のアンソロジ』にて行なわれた哲学的な警句もしくは重要な学問的発見というところで、次のような、分けても哲学史にとってきわめて重要なことが言われている(二三二頁)。「ライプニッツは周知のように、眼鏡をスピノザに作ってもらった。そしてそれは、ライプニッツがスピノザともしくは彼の哲学と行なった唯一の交流である。だけど、ライプニッツがスピノザに目も作ってもらっていたならば、彼の知らない哲学領域、すなわちスピノザの故郷であった領域へと遠望することができたであろうに」。

著者：ラインホルトにとっては自己自身を克服することが必要だっただけに、なおのこと、そういうことになった、と思うんだ。

友人：ラインホルトは、あなたの体系を、その接合部分、諸部門、さまざまな特徴において、捻じ曲げ、曲解して、歪めているもんですから、あなたが自分の体系そのものだと、もう一度認識できるようにもならないほどだ、ということが分かるでしょう。どうぞ、聞いてみてください。(彼は、『寄稿』の引用箇所、一六五―一六八頁を読む。(原注))
このやり方をどう思います？

(原注) 私たちは、この箇所を掲載することで、紙数を無駄に使うことを避けたかった。そこで、読者諸賢に、その箇所を確かめることをお願いしたい。

著者：私たちはその手法を、最も簡潔にかつ最も的確に、その原型と最高の模範からして、フリードリヒ・ニコライのやり方だと言えるでしょう。なぜなら、ラインホルトがこうしたことに身を入れ始めて以来、このような技法においては、他ならぬ、比類なき凌駕し難いフリードリヒ・ニコライという師匠だけを、自分より上だと認識していることは明らかだからです。

友人：こうした手法の影の部分も忘れちゃだめだよ。それは、論敵に、お喋りの大波を浴びせて、不合理の水門を引き上げ、そして一切合切をそうした洪水に放り込んで、何も最早わからないように、あるいは他のものから区別できないようにしてしまうのです。このような、根拠のない、基盤のない、そして限りないお喋りの技法において、ラインホルトはその原型に到達しているどころか、凌駕さえしているのです。

著者：確かに、フィヒテの『ラインホルト宛返書』に依ると、ラインホルトの文字のうちに蠢いているとされる比較的力強い精神というものについては、私はまだ、何も感じることはできません。【134】

友人：力といっても、誇張されていなけりやいいのですが。【134】
著者：とくにラインホルトは、力を消耗していたんですよ。私は久しく彼に忠告をあたえたかったのだけれど。つまり、出版するに際して、時々黒インクの代わりにアカインクを使ったら、ってね。そのことはとりわけ、「〜として」、「〜の限り」、「〜の程度に應じて」という時に、すばらしい働きをするに違いないんだけど、だけど、見てください。こうした言い回しの氾濫から、果たしてどのくらいの破片を見つけ出して、考察に持ち込むことができるかどうかです。

著者：だいたい、そうしたところから考えとることのできる最初のこととは、ラインホルトがあなたの体系を、スピノザ主義と観念論とからできた所産だと見なしていることです。自分の全生涯をかけて、こね合わせたり、貼

り合わせたりする練習ばかりしてきた彼の頭に、そうしたことが浮かんだとしても驚くべきことではありません。だつて、そうでなくても、あなた自身、こうした点について明らかに十分に説明してきたと考えられる以上、ラインホルトのような考え方は、理性的な人間だったなら、簡単に見つけられるようなものではないからです。スピノザ主義と観念論とについてのあなたの考え方は、僕にしてみればいつも、こういうものだと思つて良いでしょうか。つまり、スピノザ主義と観念論とのそれぞれの体系が、それぞれの体系の個性から際立たせられるとともに、同時に、一切の思弁的な真理や両体系の絶対的な無差別点として現われるに違いないような点を、既に独立的に含んでいたわけで、その結果、一方が他方を補完するのではなく、それぞれが独立的にそれ自身全体であつて、双方は相対的だつたり、総合的だつたりせずに、絶対的に一なるものであるつてね。さらにまた、双方が実際に矛盾していたつていうのなら、あなたの思つていられるように、この矛盾の根柢は、双方の間にはなく、独立的に考察されたそれぞれの内に存していたに違いなかつたと、僕には思われるんだ。

著者：大筋では、そのことは、スピノザ主義と観念論とについての私の見解と同じです。だけど、この関係が特殊であることは、私の叙述が進むにつれて、ようやくはつきりしてきたのです。そこでラインホルトは、短く切られた羽しか持ち合わせていないものだから、文字 (Bustid) に従つて飛ぶことも、いわんや文字に先駆けて飛ぶこともできないということをも、もうそろそろ知ることができたでしょうから、文字について、何かを予め知るなどということについては、分を弁えて断念して至極当然のことなのです。こうしたことについて、本質的なことを次にお話ししましょう。

たとえば、哲学の最高の理念が、思惟と延長との絶対的同一性とか、理念的なものとの実在的なものとの絶対的同一性とか、はたまたそれ以外のものと呼ばれても、これらさまざまに思われる表現はすべて、かなり同義的

ですよね。だから、哲学の最高の理念を言葉で捉えようとしても、哲学の最高の理念は、これらの反対命題のすべてについて、それだけで考察されるなら、一方でも他方でもなく、本質上は同じものなのです。観念的であるものは同時に実在的でもあり、思惟するものは延長しているものでもあるわけです。そこで、統一がひとえに、実際に絶対的なものだと考えられる限り、先の哲学の最高の理念によって表わされる本性において、すべてのものは存在と非存在とか、可能性と現実性とか、そうした区別がまま、一言で言うところ、非時間的な永遠の相のもとに (auf eine nichtzeitliche ewige Weise) 包括されて、表現されているに違いありません。こうしてすべてのものは、意識とともに、かつ意識にとつて措定される思惟と存在とのあの分離によつてのみ、そしていわばその分離に即して、永遠性から脱して、万有から離れて、時間的な現存在へ移行するわけです。私たちが、哲学の最高の理念において合一されたものとして措定していたものでさえ、意識においては、意識のためには、必然的に分離してしまします。だって、一方が他方に即するだけで、つまり、身体が魂に即しても、魂が身体に即しても、永遠性から離れることになるのは必定で、そこで、一方で、思惟が存在によつて措定されたものとして現象すると同時に、**[106]**他方で、存在が思惟によつて措定されたものとして現象する、そして絶対的な一つの無差別点が二つの対立する相対的な焦点において分かれて現象ことになるのです。なぜなら、自ずから明らかになるでしょうが、思惟と存在とは別々にならずに一つのまま、といつてもただし、相互に、一方が他方によつて規定されて措定される時に、それに応じて、他方も一方によつて規定されて措定される、という具合である以上、意識において措定されている分離も、相対的なものでしかないからです。意識の外部に、意識を除外したら、かの分離が何も実在しないということを証明してこそ、真なる観念論は存立することができます。さて、まさしくこの分離によつて、それも、この分離によつてのみ、万有が自らを開示するわけです、現象界全体は、すべてが一であつて何も区別できない状態から放り

出されているのですから、観念論は、現象界に関してであろうと、有限なものに対抗してであろうと、肯定的であつて、意識の外部に関してこそ否定的なのです。この意識の外部については、實在論もしくはスピノザ主義は、定言的で肯定的です。「存在が、それだけで思惟から離されていたり、思惟がそれだけで存在から離されたりする」とは「ない」という観念論の主張を、フイヒテは、一般的に極めて明晰に樹てただけでなく、思惟をできるだけ規定的に、彼の原理によつて、そして彼が思惟の性格として言い立てていたものによつて、言表していました。自我、これは、先の分離作用の最高の表現に他ならないのですが、その自我は、フイヒテによれば、純粹な作用であつて、自分自身の行為に他ならず、その行為から独立したものでなく、およそ、ただ自己自身によつて自己自身にとつてのみ在るもので、それです。自我は、それだけであるものでも、絶対的なものを顧慮しているものでもなく、同様に、へ万有から自我とともに、単に自我のためだけに分離されているものすべてでもあるのです。こうした哲学の否定的側面以上のものは、観念論としての観念論においては叙述されることがありません。観念論のこれらの必然的な限界について最初に注記して、それらの限界の外にあるものを初めて指摘した論述は、『独断論と批判主義についての哲学的書簡』にあります（*）。その真意は、『哲学的書簡』が最初に出版された時よりも、おそらく今の方が、多くの人に分かつてもらえるでしょう。だけど、ラインホルトが、こうした論件について何を持ち出してきて、相も変わらず、観念論の原理をまったく把握していないことを、とうの昔から私たちは知つていたことを実証するものでもありません。

（*）『哲学的書簡』第九書簡を参照。（F. W. J. Schelling : Werke. Bd. I. S. 250f.）

友人：僕は今、はっきり分かつたよ。自然哲学と超越論哲学との対立が、あなたにとつてどんな意味を持ち得るか

つてことは、スピノザが、彼の『エチカ』の第一部を、「自然について、万有について」と題して、第二部を「精神について、換言すれば自我について」と題した時に感じていた意味に他ならない。

著者：そうそう、それに他ならないだよ。

友人：自然哲学が哲学の体系から切り離されて、独自の学として哲学体系において規定された原理から脱して、さらに継続されうるものである限りで、あなたが自然哲学に与えている思弁的自然学という表現を、ラインホルトはいかに間違つて使っているか、気がつきましたか？ 体系そのものに統合されている部門である限りの自然哲学のために、思弁的自然学という表示を用いた上で彼は、「あなたの哲学は超越論哲学的であると同時に思弁的自然学てきだ」(*) として具合に持ち出したのです。

(*) Vgl. Cl. Reinhold: Beyträge. H. 3. 166f.

著者：こんなものは、『新一般ドイツ文庫』にでも発表されるのが丁度いいのに。僕が、「自然哲学と超越論哲学とは、永遠に対立する二つの哲学であるに違いない」(*) として言っていた箇所がそこで問題になっていなかったか？ それに何か、双方の哲学の位置にして同等の真理がようやく今になって、僕の思いつくところとなり始めてきたかのようなことを(**)、告知していなかったかな？ 先の論点は、今でも僕の思っているところなので、後者の論点をラインホルトが実際に言っていたことを、私にも確認させてください。

(*) Schelling: System des Transscendentalen Idealismus. Schelling Werke Bd. II. 331 「自然と知性的なものとの並行論に、著者が誘われてから既に久しい。そしてこの並行論をかんぜんによじめつすることは、単に超越論哲学にとつても、単に自然哲学にとつても可能ではなく、二つの学にとつてのみ可能な

のである。まさにそれゆえに、それら二つの学は、永遠に対立し合う二つの学でなければならず、それらは決して一つのものに移行することはできないのである」。

(**) Vgl. Cl. Reinhold: Beiträge, H. 3, 167

友人：確かめてごらん、ここ、一六七頁だよ。

著者：親愛なる友よ、冗談半分にも、この尊敬に値する人物を全面的に訴えようとするのなら、悪いけど、必要な文書を調達してくれないかい。

友人：既に、ここに揃えてあります。『一般文芸新聞』も。ここには超越論的観念論についての批評が載っているんです。

著者：すばらしい。——最初に引用されている箇所は、ここ、『超越論的観念論の体系』の序文、九頁だね。その箇所で私が否定していることこそ、単純にもラインホルトが今、私が試みていたとして私のせいに行っていることなんだね、すなわち、総合によって二つの学を合一する可能性のことさ。ラインホルトがその箇所を正しく理解して、そして然るべく引用してくれていたのなら、彼にとつても非常に良かったんだだけだね。

友人：僕が、あなたの体系の構成について、あなた自身から教わった限りでは、先の二つの対立する哲学は、あなたの体系において実際に分かれているのであって、その分離がないなら、あなたの体系は体系として考えることができるんだよね。既にあなたは、叙述の最初の方で、実在的な系列と理念的な系列とについて、分離がなかったなら、無差別点がどのような意味を持ったであろうか、って語っているじゃないですか。——とくに、あなたがあの箇所で、有機体の本質について提示していた命題を応用して、森羅万象の形態について、そしてそれに似ている

哲学の形態について表明していたよね。つまり、哲学は外面的には無差別であるが、内面的には、必ずや二つの対立的な根源点から、普遍的な生と運動とを拡大してゆく、って、このことは僕にとつては、はつきりしていることだと思っただけだ(*).

(*) Vgl. Schelling : System des transscendentalen Idealismus. Werke Bd. II. 480f. u. 491ff.

著者：まったくその通りなんだよ。そして同じことが、私たちの議論していたことから、既に洞察されるのさ。つまり、思惟に即する存在、存在に即する思惟、そうしたものが永遠なものから切り離されるなら、一切が包括的に把握されている双方のかの絶対的同一性は、意識において、そして意識に対して、ただ二つの対立する同一性の点によつて叙述されたり表現されたりすることしかできない、ってことさ。だけど、これらの点のいずれも、相手の点によつて存在するのであつて、まさにそれだから、【137】そもそもなら点なんでもものではないんだね。自体的にあるのは、ただ、それらを絶対的に一ならしめているもの、そして理性の眼でもって観られるべき双方の中心点なんだよ。丁度、あの単に相対的な無差別点が分離している場合に、まさにその分離によつてそていされているのが、自然哲学と超越論哲学なのさ。

友人：最も注目すべきは、話に上つているあなたの観念論についての批評においてラインホルトは、そうしたことについて幾許かは洞察してさえたようだ、ということさ。だって彼は(三六五頁で)はつきりと言っているのですから。「双方(あなたの意味するところでは自然と自我)のいずれも、その相対性によつてのみ他方を排斥するが、その絶対性によつて他方を自らの内に把握する」(*).

(*) C.L. Reinhold : Rezension von Schellings System des transscendentalen Idealismus. Sp. 365 「説明

のために廃棄された絶対的な統一、もしくは一つの絶対性の代わりに、シェリング氏が得るのは、二つの絶対的な相対性もしくは相対的な絶対性、つまり、一つの絶対的に主体的なもの、すなわち自我——そして一つの絶対的に客体的なもの、すなわち自然なのである。双方のいずれも、その相対性によってのみ他方を排斥するが、その絶対性によって、他方を自らの内に把握する。それゆえ、学において第一のものとして考察される限り、必然的に他方に帰するのである」。

著者：私が間違っていないなら、この批評のなかに、まだまだこのような注目すべきものを見つけるだろうね。

友人：実在論に対立することになったような観念論なら、このラインホルトの考え方によれば、次のような点で失敗するに違いないんだそうだ。つまり、観念論は、思惟と存在との絶対的な同一性を原理として措定しなければならぬにもかかわらず、存在を、ただ思惟によって規定されているものにするので、あの二つの相対的な無差別点のうち、ただ一つの点だけを捉えるだけで、絶対的な点を、体系の進展のうちでまったく失ってしまうというんだ。その理由は、この絶対的な点から見ると、存在と思惟との双方はむしろ、最高の理念によって絶対的に一である以上、存在それ自体は、思惟によって規定されることなんかできずに、同じように思惟は存在によって規定されることなんかできないから、というわけさ。

著者：こうしたことについて、まだまだ多くのことが話しの種になるでしょうが、友よ、私たちはそんなことのために時間を潰すわけにはいきません。しかし、絶対的なものを措定するために必要なことは、それが同時にではなく、むしろ、まったく同等のやり方で無限な実在性にして無限な観念性として措定される、ということですよ。なぜなら、それが絶対的なものとして措定され得るのは、ただ、二律背反 (Antinomie) の形式のもとにおいてこそ、

だからです。そして絶対的なものを、まったく同じやり方での二つのものとして考えようという要求が、理性に対して生じるので、絶対的なものは、一方が他方を排斥する以上、必然的に、一方だけでも他方だけでもないが、まさにそれだからこそ絶対的であるところのものとして考えられるわけです。絶対的なものが、これら二つの反省の対立項の一方のもとで固定され、その結果、絶対的なものが単に無限な存在として、あるいは無限な思惟として、一切の二律背反を欠いたまま考えられてしまうや否や、私たちは、真なる絶対性の領域から投げ出されて、単なる相対的な絶対性に存することになります。それは、絶対的なものが双方として同時に考えられるべきであるにもかかわらず、有限性、限界そして分割可能性の領域に私たちがいるものですから、すぐにそうなってしまうのです。これらの規定やその区別はすべて、どんな思弁的な体系であっても、入り口を見つげようとするためには、とりわけスピノザ主義や私の叙述の基礎になっているものへの突破口を見つけるためには、本質的なのです。さて、さて、最高の実存、絶対的なものの実存の在り処は、あの完全な不可分性にあつて、へ認識として考えられるなら存在としては考えられず、存在として考えられるなら認識としては考えられない」という統体的な無差別性にあるわけですが、同じように、一切の真に実存しているものも、そうしたものとして指定される限り、同時にではなくむしろまったく同等のやり方で、観念性の様態にして【138】実在性の様態として、魂にして身体として考えられなくてはなりません。その結果、真に、それ自体で考察されるなら、本来的に実存しているものは、一方でも他方でもなく、双方の不可分にして絶対的に同一のもの、なのです。私たちはこれを、これらの属性の一方の下に指定することなしには、これ以上規定することができないのです。こうした問題の性質上、一方で、存在の有限性によって無限な思惟が普遍的な同一性から引き離され、思惟として指定されるように、他方、対立する側面、思惟の有限性によって、無限な存在は万有から遠ざけられ、存在として指定されなくてはなりません。そこで、二つの対立する

方向をとるにもかかわらず、措定されるのは、単に一方だけでも他方だけでもなく、双方の変わらぬ同一なものであつて、観念性や実在性によつていかに規定されようとも、単に相対的な規定でしかないのです。なぜつて、あなたが他のものに対抗して存在として措定するところのもの、たとえば、魂に対抗して身体を措定するように、そうしたものは、それだけで考察されるなら、先の思惟に劣らず、認識の一様態に過ぎません。それはちやうど、ライブニッツの学説にあつて、身体もまさに魂と同様に、それだけで考察されるなら、それ自身再び一つのモナドである、というようなものです。

友人：たとえ、観念論と実在論とがまったく対立する体系として見なされることができ、その結果、観念論が物事を単に無限な認識の属性の下で考察して、実在論が物事を単に無限な存在の属性の下で考察する。なんてことは、真なる観念論に関しても、真なる実在論に関しても、生じるべくもないことなのですが、まあ、そのように言うことができたとしてもだよ、観念論と実在論との双方は、それぞれがそれなりのやり方で完全であることを前提するならば、必ずや、まったく同じ内容を持つ一にして同一の学であるだろうね。それは、事物はいずれにせよ必ずや、まったく同じやり方で、認識の様態であつたり、存在の様態であつたりするけれど、ひとえに、一つの内容と本質とを持つている自己自身に絶対^に同等^な一にして同一^の事物だ、ということと同じことなんだよね。

著者：そうそう。そして二つの学がまったく同等^の実在性を持つていて、すなわち無差別だと言つてもいいのでしようけれど、そうした無差別について、理論的で純粹に思弁的な見地において、すぐあとで語られていることを、『超越論的観念論の体系』の序文でさらに読んでさえいたら、二つの学の対立については、どのような事情にあるのかを把握することができただろうにねえ。

友人：それでもラインホルトは、あなたがそこで、純粹理論的な考察によつて語つてゐることを、全面的に歪曲す

ることを止めなかつたんだよ。

著者：純粹理論的な考察ということで私が理解しているのは、他の箇所で（*）私が純粹に客観的な哲学的営為、つまり実践的な関心の混入を一切斥けた哲学的営為と呼んでいたもの、要するにラインホルト流の哲学的営為とは反対のものなのです。このラインホルト流の哲学的営為は、彼に精神性が乏しいゆえの浅薄な主観性を、真理への愛だとか真理への信仰だとかという名の下に隠蔽しているのです（*）。実践哲学そのものが、純—理論的な、あるいは本来の思弁的な哲学の必然的な一部門であるという意味において、実践哲学についてここでは語られているのではないということくらい、【339】同じ文脈で、いかに純粹に理論化されようとも、実践哲学には影響が及ばないとされているところから、ラインホルトにだって分かることができただろうにね。

（*）Vgl. Zeitschrift für spekulative Physik. Bd. II. H. 1. S. 119

（**）Cl. Reinhold: Beyträge. H. 1. S. 67 「哲学的営為は、真理と確実性との愛から生じる努力、つまり、認識を究明する、あるいは同じことであるが、認識の実在性をそのものとして実証し、確証する努力であつただろうに。／真理としての真理への愛は、すぐに容易に、哲学的営為の本質的条件として承認される。真理としての真理への信仰は、そのようにはいかない。しかし、この信仰のない愛を、しかも真理への生き生きとした信仰のない愛を考えてみよう！ 考えるということでは私が言っているのは、いわば、予感するか、夢想する、想像するということではない。すると、真理への信仰のない真理への愛なんてものは、真理への愛のない真理への信仰と同じように、考えることができなことが分かるであろう」。

友人：親愛なる友よ、それなら、あなたがやつと今になって、二つの異なった形式の下における一にして同じ真理

を見ることを始めたとか、あなたがそのための眼鏡を師匠（バルディリ）に作ってもらったなんて、ラインホルトはあなたに向かつて証明することができないってもんだよね。

著者：後者の論点についての光学的な錯覚は、簡単に説明できるよ。だって、ラインホルトや彼の師匠が、確かに私たちが他の人々を、眼鏡をかけて見ようとしているってことくらい、十二分に周知のことじゃない。ただ、私が主張していたのは、彼らは聖人クリスビヌスのやり方に倣って手続きを進めている。つまり、私たち独自の眼鏡をちよろまかして、シャープだった私たちの眼鏡の代わりに、曇った眼鏡を返そうとしていた、ってわけだね。

友人：古人曰く、嘘つきは記憶力が良くなきゃいけないってね。今の場合は、曲解する人や捏造する人にもあてはまるんじゃないかな。仮に、ラインホルトが、あなたの哲学を、公衆の面前で歪曲することができると妄想するほど愚かだったとしてもだよ、世人がラインホルト自身を、ラインホルト自身に対抗して証人として喚問することができるようなやり方で、あなたの哲学を問い質すことなんかできないということくらいは、わきまえるだけの知性をラインホルトは持っているべきだったよね。この「寄稿」第三分冊でラインホルトが報告していることによれば、自我と自然とから双方の絶対的同一性へと高揚することは、ようやくあなたのものになった考え方であって、そうした絶対的同一性に基づいているあなたの哲学は、まったく新しい学問だ、っていうんだもの。さあ、あなたの観念論についての彼の批評にある次の箇所を読んでみてごらん。

著者：「客観的なものと主観的なものとの無制約な同一性は、この哲学のテーマであって、原理である。そして、これ以上の一切の探究に先立って、既に次のことが十分確実に分かる。つまり、無制約な同一性がもたらし得る結果は、その同一性が既にその課題のうちに入れておいたものに他ならないということ。いわば自然と自我とを超えてそれ以上考えられるのは、双方の絶対的同一性に他ならないということ、自然と自我の双方が実在的な真理と確

実性を持つのは、それらが端的に一にして同一である限りのことであるということ、自然はそれが自我から區別される時、自我の現象に過ぎず、自我はそれが自然から區別される時、自然の現象でしかないが、双方は、即自的にかつ独立的に考察され、そして実在的な真理に従うなら、全一なのである、ということが分かるのである」(『イェーナ一般文芸新聞一八〇〇年八月、三六三頁』*)。

(*) C.L.Reinhold : *Rezenzion von Schellings System*. Sp. 363 「客観的なものと主観的なものとの無制約な同一性は、この哲学のテーマであつて、原理である。そして、これ以上の一切の探究に先立って、(…)既に次のことが分かる。つまり、無制約な同一性もたらし得る結果は、その同一性が既にその課題のうちに入れておいたものに他ならないということ。いわば自然と自我とを超えてそれ以上考えられるのは、双方の絶対的同一性に他ならないということ、自然と自我の双方が実在的な真理と確実性を持つのは、ただそれらが端的に一にして同一である限りのことであるということ、——自然はそれが自我から區別される時、自我の現象に過ぎず、自我はそれが自然から區別される時、自然の現象でしかないが、双方は、即自的にかつ独立的に考察され、そして実在的な真理に従うなら、ひとえに全一なのである、ということが分かるのである」。

友人：三六五頁では、次のような声明を見ることが出来るよ。「ただ説明のためだけにアウフヘーベンされた同一性を回復することによって、客観的にして主観的なものにおける無制約なものとしての同一性は、他ならぬ哲学者の知においても、自己自身を制約する全一なものとして確証される。こうして純粹な真理が見出される」んだって。それからさ、とはしよるのは、ラインホルトがここでも何もなかったかのように、十分な説明をしないままだから

なんだけど、三六九頁ではさあ、【一六〇】「唯一、端的に根源的な真にして確実なものを知るようになるためには、超越論的哲学者なら、真にして確実なものいかなる純然たる現象をも超えて飛躍しなければならず、従つて、自分の経験的自我やその自我にとつて現われている（経験的な）客体を端的に捨象しなくてはならず、自我と客体とが根源的な分裂にあるなかでの無制約な同一性を思惟し、観想しなければならぬ」。

著者：なんの議論の余地もない箇所が三七一頁にあるよ。そこでは、こう言われているねえ。「實在論と観念論、それらのうちで實在論は自然哲学に、観念論は超越論哲学に等しいものとされるが、それらはただ相違している、といつても必ずや相互に参照し合うへ一にして同一の自己自身を条件付ける無制約なものへの眺めに過ぎないのである」。

友人：さてさて、あなたはこれまで、自然哲学と超越論哲学との双方における一にして同一の真理を見てこなかった、というわけだね。

著者：そんなに遡らなくても良かったんだよ。だって、『寄稿』第一分冊八六頁にも、同じようなことが、もつとはつきりと言われているからね。そこではこうなっているよ。「原真理、もしくは實在的で絶対的なものを、自我と自然との全一性もしくは同一性に、すなわち双方の絶対的な同一性に措定することは、シェリングの考えにも上っていた。超越論哲学もしくは純粹な知識論、そして自然哲学もしくは純粹な自然論は、一にして同一の事柄の、すなわち絶対的な同一性 (Dieselbigkeit) の、全一なるものの、二つの相違している眺めに過ぎないのである」(*)。

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. I. S. 85ff. 「彼 (シェリング) が発見したのは、絶対的なものは純然たる主観性でない限り、純然たる客観性もしくは純然たる自然そのものに他ならず、そうでしかあり得ないということである。この結論に到る最短距離を、彼は次のようにして進んだ。つまり、シェリングは、彼

の哲学的営為の第一の課題を樹てるにあたって、直ちに実在的な認識を、あるいは彼の言うところの知を、客観的なものと主観的なものとの同一性において存立せしめ、その結果、原真理もしくは実在的な絶対的なものを、自我（知性）と自然との全一性もしくは同一性のうちに、すなわち、双方の絶対的な同一性のうちに措定する。ただ、この同一性は、知を説明するために、この説明に先立って、アウフヘーベンされるものの、この説明において、この説明によって、まさに説明されるがゆえに再び回復されなくてはならないのである。（…）／さてしかし、それによって、哲学的営為における独断論も、把握され、しかもそのようなものとして常に相対的ではない第一のものを、絶対的なものとして想定して——そしてそれによって、原真理ならびに一切の真なるものを、哲学から放逐するようなものであって、完全に完結して、そして思弁における従来のすべての混乱、それどころかおよそ起こり得る一切の混乱の絶頂が極められたのである。（…）／超越論哲学もしくは純粹な知識論（絶対的主観性の学）そして自然哲学もしくは純粹な自然論（絶対的客観性の学）は、一にして同一の事柄の——すなわち絶対的な同一性の、全一なもの、二つの相違している眺めに過ぎない。純粹な観念論としての知識論と、純粹な唯物論としての自然論は——一にして同一の哲学の基礎学なのである。成就された観念論は唯物論に帰着して、唯物論は観念論に帰着する。さらに、観念論も唯物論も、懷疑論が独断的であって、すなわち認識における客観的なものと主観的なものとの間の区別の実在性を端的に否定する限り、懷疑論をも受容する。従って、従来の誤った思弁の努力はいずれも、そうでなくても既に知ってか知らずか、求めていたものを、單なる純粹な——自我性において見出すのである」。

友人：一体どうして、第一分冊と第三分冊との間で、事態が一変してしまつたんだろう。第一分冊でラインホルトは、自我と自然とを超えて、双方の絶対的同一性を原真理として措定することを、あなたに対して非難して、今、もちろん事情が同じことを分かつていながら、こうした同一性ということそれ自体、あなたの原理だと主張していたことを、まったくもつて忘れてしまつてゐるなんて。

著者：これがバカというのなら（どうして私はそれを疑わないことがありますよか）、見本のようなものです。あなたは彼を捏造する人と呼んでゐるけれど、なじまないような気がするんだね。だって、彼には最も通俗的な部分が出てゐることを、ご承知でしょう。

友人：だけど、あなたは一体どうやって、その手の行き過ぎた現象そのものを把握させようつていうんだね。

著者：私には、それ以上単純なものはないと思われるものがあるんだね。そのためには次のことを想定しさえすればいいんだ。つまり、ラインホルトは、自分がそこに書きとめたことを本来、決して知つていなかった、そしてラインホルトは今、理解してゐないことを初めから理解してゐなかつた、つて。だからこそ、ラインホルトが本来的にそう理解することを決して止めなかつたのは、何も理解し始めてゐなかつたからであり、今になつてやつと立ち上がったのは、【二四】これまでまったく考えなしで読んできていて、同じように無思想のままもう一度書き付けたものにあつて、何事かを考えることをラインホルトが余儀なくされたからであつて、こうしたことに關しては、これ以外にもまだまだ多くの他の軌跡が証拠として挙げる事ができるでしょう。だって、くだんのその批評のなかに、あなたは多くの誤解や反論を見つけたかもしれないけれど、それらは明らかに、ラインホルトが何ら考えなしにそうした表現を紙に書き付けた、ということを示すものでしかないからです。あなたには不十分だと思われるかもしれないけれど、こうした批評はほとんど錯乱に近いものだと思われる以上、この錯乱が伝染性のものであつて、

こうした点で影響を受け易いことをラインホルトがこれまでも示していたことを考えてもみてよ。それに、今、読み上げたばかりのところ、ラインホルトは、こんなことを持ち出していたよね。つまり、超越論的哲学者は、純然たる現象のどれをも超えて、それに従ってすべての他のものに先立って経験的・自我を全面的に捨象する、それにもかかわらず超越論哲学者は、今やその師匠を口を通して語り、そして、我々の体系における自我性がきわめて明白な個性だと信じ込んでいるって（『寄稿』第一分冊一五九頁）（*）。こんなことは、その師匠なる人（フィヒテ）は頭が固いものだから、頭のうちへ措定してしまっておこうとしたものなんで、確かに彼の生活にあつてはそこから抜け出せないものなんだよ。そしてこうした把握から、ラインホルトは、今や、フィヒテと私に対抗して、勝ち誇ったかのように論証しているわけなんだね。

（*）CGBardili : *Beiträge*, H. I, S. 158f. 「フィヒテの観念論が、通俗的な、いわゆる人間悟性と非常に対照的であるにもかかわらず、だいたいにおいて、それと同じように仕事を営んでいるというのは、ただ、（1）フィヒテの観念論が（カントに対抗して）普遍的なものを、極めて手に取るように明白な個性性にもつて、すなわち自我性に絶対的に結びつけようとするからであり、（2）フィヒテの観念論が事実（*Faktum*）でもつて、それも活動的なものを欠いた事実でもつて（行為の行為たる——彼の事行（*Tathandlung*）でもつて）、存在を欠いた事実で持つて哲学の端緒としたがために、ギリシア人にとつても可能でなかったことをして、それゆえに、まさに根柢の学を最も根柢のないものにしてしているからである」。

友人：最後の点は、全体の説明にはあてはまらないよ。だって、ラインホルトは、その印刷された報告から明らかのように、一八〇〇年二月以来、既に自分自身の悟性を全面的に征伐しまったんだから（『寄稿』第一分冊一六三

頁) (*)。だからさ、八月の日付のあるあの批評や、もつとあとの日付のある、引用された論評にあつては、とうに、悟性錯乱の痕跡が見られても不思議じゃないんだ。

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 1. S. 163 unten (バルデイリによる一八〇〇年二月三日付書簡に対するラインホルトの返書) 「こうした(学兄の哲学を誤解するという) 障害を前にした不安から、私は学兄の哲学を私自身で彫琢することを、当面はまたも中止しました。そして学兄の哲学へ私が携わります際には、学ぶことに、すなわち最も本来の悟性において、より純粹に受容し、追思惟することに限定した次第です」。

S. 163 oben 「しかし、私が不幸な合同の試みを更に進める前に、私の善き守護神は、私をもう一度、学兄の『第一論理学綱要』の学派へと連れ戻したのです。そして新たに私は、生真面目にも学兄において純粹に学ぶことに自己限定したのでした。それによって私は、結局、私の甘やかされた構想力を征伐し、昔ながらの超越論的なタイプを、最終的に新たな合理主義者のタイプによって、私の頭から放逐したいのです」。

著者：そうした悟性錯乱の軌跡は、まだ最高度には達していないもの、はつきりしているよ。『寄稿』の最近号では、最初の心情の動揺に加えて、もつと多くの他の動き、つまり悟性を錯乱させるだけでなく、感性さえもぼやけさせるような、病んだ虚栄心の疼きが付け加わったようなんだ。その結果、誰かがラインホルトに、その錯乱した立場を示したところで、彼はもはや見る眼を持っていないんじゃないかな。ですから、彼とその師匠とが、僕らに対抗して持ち出そうとしたものこそ、僕ら自身によって断念された理念だつてことが今となつてはもはや隠しようがないもんだから、不安というものだろうけれど、彼らはこの不安を必要とすることを知らなかったんだ。この

不安を超えてこそ、彼らに正しい理解が開かれたに違いないのにね。そのあとは絶望です。だって、彼が自分の論件のために持っている武器は、お喋りでしかなく、それも今や、突然止められてしまったようだ、ということを知るからね。ラインホルトは、私の『叙述』から、観念論が極めて明白な個性性から出発するのでは決してないということを知り知ったわけで、それは頭上への余りに強烈な一撃でしょう。なぜなら、少なくとも、このことを彼は、氣論の余地なく確実だと考えていたからです。今や、暗誦されたような昔ながらの観念論についての規定は、もう適切ではありません。ですから、とりあえず、お喋りはもうおしまい、つてわけです。

友人：でもさあ、やつとこすつとこ手探りしながら、結局は何がしかをものにするために、時間だけが欲しいという不安の叫びを、とりわけフィヒテに対抗する論評から強く聞こえてくるんだけど。ラインホルトは繰り返して繰り返し、ふれまわっているものだから、僕も言い終わらないし、それどころか、僕に話をさせようとさえしないんだ。だけど僕は、まだまだ多く喋って、説明しなくちゃならないし、修正も加えなくてははいけません。【15】

著者：さて、ラインホルトは、彼自身の論証に矛盾をきたす私の体系をありとあらゆる力を加えて新たな体系にしようとする振り絞っているけれど、それは悪意からではなくて、困り果てたからだ、というわけではないでしょうね。だって、ラインホルトが私たちの体系だと見なしている不合理な体系のところ、彼の全精神力を首尾よくあてがうことさえできなかったのだから、彼にとって新たなこの体系を反駁するために、どこから力を得ようつていうんだらう。

著者：ラインホルトにとってその体系は、もちろんまったく新しいし、きっと新しいままでしょうね。というのも、その他にもあなたは、観念論と自然哲学との叙述が分かれていたことに関連して目下の『叙述』において実際に新しいことを、当にあなたの見解として告知してきたからね。既に一八〇〇年五月に、ですから、あなたの『超越論

的觀念論の体系」が出版された直後に書かれた論稿、「自然のカテゴリの演繹」の終わりごろ、あなたが自然哲学と觀念論との関係について説明した後で（その説明から、あなたの体系の全理念が分かるというのですが）、極めてはつきりした表明がなされているじゃない。あなたが「ここで初めに全体的に語ったことを基礎付けるためには、準備が長い間、行なわれてきた。しかし、觀念論的な観点から自己意識の完全な歴史（eine vollstaendige Geschichte des Selbstbewußtseins）を前提しなかったなら、論述は可能ではなかった。そのためにあなたの觀念論の体系」、さらには「先の著作の内容が、普遍的な思想集団に突入して、受け入れられることを希望できるとしたら、かの著作で基礎付けることを考えているそのものから始めることになろう」（『思弁的自然学雑誌』第一巻第二分冊八七頁）。

著者：先の表明に関連して私は、最近の『叙述』での序文で、「私は私自身、意図していたよりも早く、この『叙述』を告知している」と書いているんだ。なぜなら、今となつては、ラインホルトとその共犯者たちについて、何も言わないままでは、『超越論的觀念論の体系』という著作の、皮相ではない本當の狙いが広く理解されているなどと自負することができなかつたからです。その他にも、ただ単に、鵜呑みにすることに自己限定するのではなく、自己活動的に、自分の頭で何がしかの情報を集めることのできる読者諸賢には、普遍的なものにおける真なる哲学の本性について、私の本来的な考えを知って頂くためだからといって、体系を正式に樹立することなんか必要ではないでしょう。だって、上述の箇所では、ラインホルトでさえも、（なんら意識しなくても分かるようなものではないのですが）、自然と自我とを絶対的に一たらしめているものが私の全哲学の原理だって、言わざるを得ないわけですから。だから、ラインホルトは、彼の言うところの、私の秘教的（esoterisch）な学派の仲間でさえあつたなんて、すんでのところで結論付けなくてはならなかつたりして。

極めてはつきりした告知と、この学の一般的なプランさえをも含んでいる論説があります。そこで、エッシエンマイヤーによる、彼自身の観念論の見解からとってきた反論が、反駁されるはずでありました（*）。（原注）

（原注）とりわけ、上述の論稿の、一二四、一二五、一四三、一四四頁がこれに当たります。【143】

（*）シェリングの「自然哲学の真なる概念と然るべき自然哲学の諸問題を解決することに関するエッシエンマイヤー氏の論文に対する付論」

友人：ラインホルトは、『寄稿』第二分冊で、あなたの哲学を叙述することに取り掛かったときは、間違いなくこの箇所を読んでいただろうと思うけど。あなたの『思弁的自然学雑誌』の先の号、第二卷第一分冊は、あの『寄稿』の第一分冊よりも早く刊行されていたのね（*）。

（*）シェリングの『思弁的自然学雑誌』第二卷第一分冊は、一八〇一年一月に発行され、ラインホルトの『寄稿』第一分冊も、一八〇一年一月に発行され、第二分冊は同年三月三〇日に脱稿されている。

著者：彼がその箇所を読んだか読んでないかということとは、どうでもいいよ。それに、たとえ読んでいたとしても、ラインホルトに理解できたのは、彼が塑像していたようになっていいるということ、そして第一分冊の序文（八頁）で自ら断言していたように（*）、時代が哲学にあつては、非常に本質的な後退をしなくてはならなかった、というのでしかなかっただろうからね。

（*）C.L.Reinhold：Beyträge, H. I, S. VIII 「論理学」『それは、アリストテレス以来、なんら本質的な歩みを前進させることはなかったが、後退することも許されなかったが』、結局、哲学が論理学とともに、

絶対的な同一性―体系、ならびにそれと最近の（ラインホルト流の）二元論との関係について

論理学によつて、あるいはむしろ論理学そのものを、眞の学問的な哲学として、直線的な進展の小道として見るべきであつたのに、非常に本質的な交代を余儀なくされた。実際に哲学は、そうした後退をしてしまつていた」。

友人：まつたくだよね。非常に本質的な後退ですよ。時代というものは七里靴を履いて後退することもできるんだね。

著者：彼の頭の中がすっかり錯乱していることに、私は、私の新たな『叙述』を通して予期していなかつたということとは否定できないね。それでも、そうしたラインホルトの錯乱は、意外なことではないんだよ。だつて、彼や彼の師匠が私たちをいかに不合理に理解していたかつてことくらい、ラインホルトにとつてもほとんど十分に、見抜くか、せめて少なくとも予感することくらい、できていたんじゃないかな。つまり第一には、彼らが私たちの意見だと主張していた、それも上述のように、大変苦勞して、私たちの意見だとしながら反駁さえしなかつたものにおいて、まあそんなに多くはないけどね、第二に、彼らが私たちからくすねとつて、そしてまたしても歪曲して理解して私たちに対抗して用いようとしていたものにおいて、不合理に理解していたわけだよね。こうした単純ではない、二重、三重の錯乱を抜け出そうとすることは、ラインホルトの力を超えているよ。彼が、その粗雑で貧弱な武器のすべてをもつてしても、これまで到達することのできなかつた地点、そして、個々ではまさしく最前線に位置して、ラインホルトの影響の及ばない地点、そうした地点に向けてラインホルトが突き進むなんて、できつこありません。なぜなら、私たちはこれまででも、そして別の働きかけをもつて、少なくとも、無化を本能的に予感していたからといって、極めて深く制限されていることとどんなに調和するのか、ということを見てきたよね。無化を予

感すると、無化の力がどこにあるのかを見る際に、不安と無力な痙攣の発作を起こすってわけさ。こうした状況で弱い人間にとつて最も手近な逃げ場所といえ、対抗を対抗として見るのではなくて、致命的な対立をむしろ最高の合致だと見ることなんだね。

友人：ラインホルトの最初の心の動きは、いつものことなんだけど、たまたまかもしれないけれど、融合を實行しようする願いだったのは、明らかです。そうした彼の論説全体は、そうした試みの失敗した結果でしかないよね。

あなたが、『我が哲学体系の叙述』で用いているあなたの財産とも言うべき言葉を、ラインホルトの師匠は、フィヒテやあなたの著作から、盗人根性でくすねとり、まったく顛倒した用法へと変えてしまったってわけさ。またいろんなポテンツによって諸事物の段階系列を表現するなどの方法を、この師匠は自然哲学から猿真似したってわけさ。最も本来的な悟性において、純粹に学ぶことに、純粹に受け容れて追思惟することに一生懸命になっていた、キリのない学生気質は、ここではどこに見られるって言うんだらう。またラインホルトの論説全体が、もともと、あなたと師匠とが完全に統一しているっていう、傑作な前提から出発しているってこと、分かるよね。ところがさ、引き続きラインホルトが【124】論証を行なうそのやり方は、次から次へと恥の上塗りってわけさ。そして彼は、常に、(一)ここでは明らかな合致を、そして(二)全体としては対立があるという、二つのことを実証するっていう、限りなく馬鹿げたことを犯すことになってしまったんだね。結局のところ彼は、二人の体系が類似していることについてひたすら語るだけで、それらの体系の本来的な原因は、ラインホルトにとっては、明言されているように、まったくどうでも良いものでもあったんだ。

著者：こうしたことについて、ラインホルトは余り知りたがっていないと思うよ。だけど、それなら直のこと、私たちは問題の根拠に到ることを自らに課しましょう。でも、その類似しているって、どういうこと？

友人：第一の類似性は、（彼の言う）二人の体系は、絶対的な同一性から出発しているってことです（*）。

（*）Cl.Reinhold : *Beiträge*, H. 3, S. 169f. 「バルデイリの体系も、最近のシェリングの体系も、絶対的な同一性から出発している。しかし、それらのいずれも、その際に、まったく違ったことを理解しているのである」。

著者：それが極めてがさつな無知というものでなかったなら、最高度の恥知らずでもものでしょう。でも、第一のものは絶対的な同一性です。この国民が絶対的の同一性をどう呼んでいるか、そして、出発するのは絶対的な同一性から他ならないことを、どのように誇りに思っていることでしょうか。

友人：今後、つまり時の経過とともに国民がいろんなことを経験した後になんと呼ばれるかははっきりと分かりません。でも、差し当たり、国民が前提しているのは、思惟としての思惟が、議論の余地なき理性の性格であって、議論の余地なき思惟の性格が、絶対的な同一性だ、ってことです。

著者：そこで、理性の性格が思惟にあり、思惟の性格が絶対的な同一性にあるなんていう、つまらないことこそ、自慢されている発見だつてわけだね。そんなものを、誰が彼らから借りてこようと試みるっていうんだらう。こんな陳腐な同一性、思惟の同一性が彼らの原理なの？

友人：そうなんだ、ラインホルトはすぐに、こう付け加えているよ。「二人の体系のいずれも、その際にまったく違ったことを理解している」ってね。

著者：そんなことなら、もう放っておきたいね。さて、あなたはさあ、いったい何が全体たるべきで、全体とは一体何だ、と思っているの？

友人：私が何だと思っているかって？——そりゃ、無ですよ。

著者：頼むから、無と人間の感覚とを結ぶ、ありとあらゆる可能性を探してくれないかなあ。私自身にとっては、そうしたまっただけ没感覚性の前で、悟性は身動きできないんだよ。【145】

友人：あなたが彼らから、その言葉を学んだなんて、彼らでもきつと言わないでしょう。だって、彼らこそ、それを僕たちから盗んで、そして彼らの卑しいガラクタに適用した、ということをよく分かっているでしょうから。ラインホルト自身、彼のあらゆる叙述において、絶対的な同一性という言葉、あなたの哲学の主要理念として挙げているんだよ。

あなたがそれを用いているのと同じ意味で、フィヒテも何回か用いています。とりわけ、彼の観念論の思弁的性格を規定するためには、非常に重要で、そして非常に注目すべき箇所、彼の道徳論の緒論で、そうした箇所があったように記憶しています（二頁、七頁）。だから、この概念があなたによって、今初めてこの意味で用いられた、ということも考えることができなわけです。

著者：これはまた、私には分からないなあ。いわば概念が二義的であり得るのだろうか、それともその概念をおよそ理解しない人たちの場合と違って、二義的になることがある、っていうんだらうか。

友人：たとえば、あなたは絶対的なものを、形式上は主観にして客観というように規定しているけど、本質上は、主観でも客観でもないもの、として規定しているよね。

著者：絶対的なものが、それ自体もしくは本質に従うなら、いっぼうでもたほうでもなく、だからこそ、双方の絶対的な同一性である、とうことは、観念論の一般的に周知の命題です。たとえば、私の『超越論的観念論の体系』四三三頁の次の箇所を読んでご覧よ。

友人：「もし、かのいつそう高きもの（自由なものや必然的なものを超えているもの）が絶対的に主観的なものと絶対的に客観的なもの、意識的なものと無意識的なものとの間の同一性の（普遍的な）根柢に他ならず、この同一性がまさしく、自由な行為において現象するためには自己分離するというのなら、かのいつそう高きものそのものは、主観でも、客観でもなく、また同時に両者であるのでもなく、なんら二重性の存しない絶対的な同一性でしかあり得ない。そしてこの絶対的な同一性は、すべて意識の要件が二重性であるがゆえに、決して意識され得ないのである。この永遠に意識されないものは、いわば精神の国の永遠なる太陽であって、それ自身の曇りなき光によって、隠れている。そしてその精神の国の永遠なる太陽は、決して客観にはなりはしないにもかかわらず、すべての自由な行為に自らの同一性を刻印するのである。同時に、すべての知性にとっても同様なものであって、すべての知性が単にそのポテンツに他ならないところの見えない根柢であって、自己自身を規定する私たちの内なる主観的なものと、客観的なものもしくは直観するものとを永遠に媒介するであり、同時に、自由に置ける合法性と、客観的なものの合法性における自由との根柢なのである」（*）。

(*) Schelling : Werke, Bd. II, S. 600

著者：その本の四七一頁には、次のようにはつきりと表明しているよね。「全哲学は、絶対的に同一なものとして、端的に非客観的である原理から出発するし、また出発しなくてはならない。」（*）。——この絶対的に同一なものは、そうした出発に続いてすぐに、【46】それ自体で主観的でも客観的でもないものとして規定されています。これはただ、知的直観のみ従うわけです。知的直観によって主張されるのは、知的直観が藝術によってのみ、普遍的な客観性を獲得する、ということなのです。「藝術作品だけが、それ以外ではいかなるものによっても反映され

ないものを、すなわち自我において既に分かれたかの絶対的に同一なものを（それゆえ、個々では明確に、絶対的に同一なるものは自我に対立している）、それゆえに哲学者が意識の最初の行為において既に分かれたものとして措定しなければならぬものを、反映（reflectieren）するのである」（*）。

（*） Schelling : Werke, Bd. II, S. 625 引用に当たって一部語句の変更がなされている。

友人：どうしてこの箇所にも、あなたの哲学の眞の精神を見出さなのまま、長く来たんだろう。

著者：私には、それは非常に良く分かるのです。叙述するためには、あるいは著作を著す際には、選択意志によって自らを限定することができるという理念を持っている人は、ごく少数の人に限られています。あなたは哲学を本職として営んでいますけれど、彼らは、他人によつて哲学されているのを知りたいわけです。彼らの知っていることとはいつでも僅かなので、彼らはまたいつでも、それが適切であろうとなかろうと、蓄えていたものを一切合切ぶちまけるつてわけだね。そこで、彼らは、超越論的観念論の叙述を私が行なった時に、本当は、まさしく観念論だけを叙述しようとしていたとか、モナドロジーの叙述でも、唯物論の叙述でもできたんだ、なんてこと、考えることができなかったんでしょね。

観念論が自らをそのなかに留めておく限界、そして私の叙述では、初めからすぐに明確に語られている限界、それは、観念論が自己意識を超出しないということなのです。「私の課題の制限によつて」と三一頁で言っています。

「つまり、私を限りなく知の範囲に留めおく私の課題の制限によつて、私にとつて（最初の知としての）自己意識は、自己活動的なものになって、すべての存在の、ではなく、すべての知の絶対的な原理になる」（*）。——「課題そのものに対抗して、あるいはむしろ、課題の規定に対抗して、独断論者が異議を申し立てることが何らできな

いのは、私は自らの課題を、まったく選択意志的に限定することが許されているものの、選択意志的に拡張することとは許されていないからである」(**)。論件のこうした事情にあつて、意識のうちで、同時に意識とともに分かれているすべてのもののあの絶対的な統一や、この——まさにそれだからこそ、意識の外部に存している同一性は、観念論としての観念論の原理にはなり得ませんが、そうした同一性は、観念論の目指す最高のものであつて、そうした同一性において観念論は自己自身を終えるのです。——しかしながら、全哲学、すなわち実在論と対立する観念論でも、観念論と対立する実在論でもない哲学なら、そうした同一性から出発する、ということが、上述の箇所主張されているわけです。

(*) F.W.J.Schelling : System des transcendentalen Idealismus. Werke. Bd. II, S. 357

(**) Ebenda S. 358

友人：それじゃあ、全哲学について、たった今、語った言葉を、あなたがこれまで語ってこなかったなんて、考えられるわけがないんだよね。

著者：私ができることを十分に語ってきたことに間違いないよ。だって、そうでなければ、簡単に分からせることのできないラインホルトでさえ、それを私に受け売りしていたくらいなんだから。[147]

友人：分かっているさ、ラインホルトが彼の批評で、彼のやり方で、止めることのできないままに、一〇回も繰り返したんだ。つまり、主観的なものと客観的なものとの絶対的な同一性は、あなたの哲学にとつては一つの根本真理であつて、一切がそこに還元される(『一般文芸新聞』前掲号三七二頁)って(*)。前に既に(二三頁で)(**)引用した箇所、ラインホルトが主観的なものと客観的なものとの無制約な同一性と呼んでいたもの、そして彼に

困ると、この哲学の主題にして原理であるものを、彼は三六四頁で、一切の客観的なものと主観的なものとの端的に根源的な同一性と呼んでいます。それどころか、彼は同じ文脈で、問題については、それしか把握していないようだ。こう言っているよ。「この同一性は、まさにそれゆえ、絶対的であって、そして絶対的なものとして何ら説明を必要としないものに違いない。なぜなら、同一性を説明するためには、既に同一性をアウフヘーベンしてしまっていなければならないからである」(***). あなたがさっきの箇所で、へそれ自体、主観的でも客観的でもなく、また同時に両方であるのでもないものと呼んでいるものを、ラインホルトが、無制約な同一性というこゝとで表示しようとしたことは、三六九頁で、「同一性がそうしたものとして明らかに示されるのは、根源的にただ藝術直観にとつてのみである」(***). と語っているところから明らかです。

(*) C.I.Reinhold : Rezension von Schellings System. Sp. 371 「シェリング氏の哲学にとつて、客観的なものと主観的なものとの絶対的な同一性は、一つの根本真理であって、どんな他のものにも、そこに還元される」。

(**) Vgl. C.I.Reinhold : Rezension von Schellings System. Sp. 363

(***) C.I.Reinhold : Rezension von Schellings System. Sp. 364 「シェリング氏は、知を、一切の客観的なものと主観的なものとの端的に根源的な同一性の作用として、あるいはむしろ行為として説明することによつて、一切の独断論を超えることができる、と考えている。その同一性は、主観的なものと客観的なものとを、自己自身のうちで、自己自身から、自己自身にとつて、そして自己自身によつて切り離すのである。彼の哲学的な當為が目指すのは、客観的なものと主観的なものとの同一性を説明すること以上でも以下でもない。この同一性は、まさにそれゆえに、絶対的であって、そして絶対的なものとして説明が

できるものでも、必要なものでもないに違いない。なぜなら、同一性を説明するためには、既に同一性をアウフヘーベンしてしまっていないなければならないからである」。

(***) C.L.Reinhold : Rezension von Schellings System, Sp. 369 「根源的な同一性 (Dieselbigket) が、そうしたものとして明らかに示されるのは、根源的に、ただ藝術感覚による美的直観においてである。

著者：十分、いや十分過ぎるくらいだよ。それは、私たちがとづくに気付いていた妄想なんだよ。限界に達したいなら、次のことに注目すればいいんだ。つまり、彼にとって、それ自体で主観的でも客観的でもないものへの還帰が、こっそりと、絶対的な主観性への還帰になる (三七二頁) (*) っってことをね。

(*) C.L.Reinhold : Rezension von Schellings System, Sp. 372 「さて、純粹自我は、哲学者の意識において、自己自身を条件付け、規定することから始め、哲学者の静観の下で、それを継続して行い、——主観的なものと客観的なものが、端的に相互のなかへと消失するところの自己直観の最高のポテンツである——美的直観の演繹を介して、純粹自我が絶対的な主観性たる、すなわち純粹自我たる自己自身のうちへ、必然的に喚起するまで続けるのである」。

友人：こうした考えなしもまだ、彼が『寄稿』第一分冊で、スピノザについて、「スピノザは絶対的なものを、絶対的な客観性として、そしてまさにそれゆえにこそ、延長の無限なものとして規定した云々」(*)と語っているのよりまだましですよ。絶対的な主観——客観性から出発しているにもかかわらず、観念論が、絶対的な主観性などから出発しているとされたのも、同様に考えなしですよ。

(*) C.L.Reinhold : Beitrage. H. 1. S. 23 「哲学的営為が、その最初の課題の解決にあたってから既に、一切の客観性と主観性を超え出ないまま、そしてバルデイリの『第一論理学綱要』ではうまくいつているのだが、一切の客観性と主観性とをこれらから排斥する絶対的なものへと、すなわち第一のものそのものとしての原真理へと——一切の客観性、可能性、現実性、原因、そして実体の根拠へと——突き進まないのなら、哲学にとって欠くことのできない原真理もしくは絶対的なものは、フイヒテと一緒に、絶対的な主観性、すなわち純粹で単なる自我としてか、——あるいはスピノザと一緒に、絶対的な客観性、そしてまさにそれゆえに、延長の無限者などとして表象されなければならないことになる」。

著者：だけどさ、彼が、真の絶対的な同一性と、彼が絶対的な同一性だと呼んでいるものとの区別を、はっきりと明らかにしてくれたなら、彼については非常に満足というものなただけだ。

友人：心配しなくていいよ。彼がそれをできたのならいいのだけれど、確かにそれをしなくちゃいけなかつたよね。著者：彼のいわゆる同一性は、第一分冊での彼の冗漫な説明から私が理解し得た限りでは、類概念のまったく通俗的で、単に論理的な同一性に他ならず、ヘーゲルが非常にうまく表現していたように、抽象的な悟性の同一性に他ならないのです(*)。このことは、初めのほうの記述から、一番はつきりしてきます。そこでとりわけ、限りない反復が私たちからなくなりはいないことを、とりわけ観望しておこうよ。限りない反復って、悟性概念をうまく言い表しているよね。そこには理念の痕跡などにもない、だって、理念は、普遍的なものの特異なものとの対立を前提しているから、反復され得ないものなんだからね。私たちはまた、ラインホルトにあって、一面では、概念の抽象的な統一

を、【148】限りなく反復されるものを持つているとともに、多面では、端的に対立しているものとして非同一次性を、思惟の適用のために必要な素材の性格としての純然たる多様性を、ですから、まさしく絶対的な特殊性を、そこでは絶対的な統一性としてもつてわけです。それらの双方は、思惟としての思惟の適用において初めて総合されるのであって、ですから断じて、決して絶対的なやり方で合一されているものではありません。もし、先の同一性そのものに従属するものだというのなら（それが、いわば同一性であるのは、ただそれがたんに、絶対的な二元論の「ファクター」に過ぎないからに他ならないのですが）、そうした同一性に与えられているのは、必ずや無限性でもあるわけです。というのも、概念はなるほど概念として、そしてそれ自体として、無限だからです。概念は概念たるためには、量や限らない反復などを必要とはしません。ところが、まさにそれゆえに、この無限性もかの統一も、純然たる抽象的なものでしかなく、誤った抽象は、あとで、多様な素材において出来上がって固定された有限性に無限性が持ち込まれるので、ここでもまたしつぺ返しをくらうわけです。この対立を超えてはそれ以上進みません。真なる思弁が上で結び合わせるものを、彼らは、下で一緒にして、そして彼らの他にも誰かが、思惟の適用などなどの学則風の表現で満足するだろうと、単純に考えているんだね。あなたは、古今の書物のなかにある、幾つか、他の人が言った良い言葉を知っていると思うけど、彼はそれでもって始めることを知らなかったんだ。彼が何を考えているのか、訊ねる必要なんかないよ。だって、完全な大風呂敷なんて、賢者にも愚者にも同じように理解できないもんだ。とりわけ、師匠にとつては、プラトンのあらゆる頁から拾い集めることができるような、へ多において存立する一ととか、へ自己自身に等しいものとか、へ自らに等しくないものとかいう幾つかの表現が、ライオンホルトやフィヒテの概念や表現と合流するもののように思われているんだね。ところで、似たような種類の非哲学は、既に、プラトンの時代にあつても、必ずしも知られていなかったわけでもなさそうだねえ。だって、同じ箇

所で彼はこう言っているのだよ。「昔の人々は我々よりも優れており、神々にもっと近いところに住んでいたから、永遠にあると言われるものすべての本性は、一と多から成っていて、永遠にあると言われるものは自らのうちに無限性と限界とを合体したものとして含んでいるという言い伝えを我々に遺してきてくれている。問題のこうした性質からして、我々はいつでも、どんなものについても、一つの理念を前提し、求めなくてはならない」。——同じ文脈で、プラトンはこう続けているんだ。「しかし、今は哲学者と自称する人たちは、一と多とを適切にはなく、余りに早く、あるいは遅く措定し、統一の後にもかかわらず、直ちに無限に多くのもの（無限な多様性）を措定して、中間がそれらから脱けてしまう」（『ピレボス』16c. 17a)。こうして、この自称哲学においては、思弁にとつて唯一至高なるものについて、すなわち、無限なものとの有限なものでさえも、統一と対立でさえも、再び一つになっているところのものについて、一言で言うところ、永遠性であるものの真の絶対的な同一性や真の無限性については、何も語られていないのです。

(*) G.W.F.Hegel : *Gesammelte Werke*, Bd.IV, S. 18 「思惟としての思惟の本質もしくは内的性格は、ラインホルトによって、一にして同一なもの、一にして同一なものとして、一にして同一なものにおける一にして同一なものによる限らない反復として、あるいは同一性として措定される」。

S.19 「分析が統一として呈示するものは、主観的と称される。そして思惟は、多様なものに対立している統一として、抽象的な同一性として性格づけられるのである」。

S.25 「絶対的な思惟、もしくは理性の表現たる A || A は、悟性的な命題において語る形式的な反省に対して、ただ悟性の同一性、純粋な統一という、すなわち対立が捨象されているような統一という意義を持つに過ぎないのである」。

S.27「こうした絶対的な対立の基礎は、哲学を論理学に還元せんとする有名な工夫がそうであるような形式的な仕事に、Aを限りなく反復するという、悟性の統一の総合以外の内在的な総合を許さないのである。」

友人：それをラインホルトは、有限なものとの融合(*)とよぶわけです。

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3, S. 169 「シェリング氏が、一にして同一の本質における自然と知性を解決するために用いる媒体は、絶対的な同一性であるが、これはシェリング氏のフィヒテ的でスピノザ的な眼前の前で、客観的なものと主観的なものとを統体的に無差別に具体化して、そして、無限なものとの有限なものとの融合によって、さらに相対的なものが絶対的なものに昇華することによって、原真理の代わりに原仮象を措定するものであることに間違いない」。

著者：彼は無知なもんだから、最高の理念への誹謗中傷でさえも勘弁しなくちゃいけないだろうね。【149】

友人：あの自称哲学が、自らを高揚したなどと付け加えている最高のものだって、あなたの体系で、量的な無差別(A²)と言われているものでしょう。あの自称哲学にあつては、この量的な無差別に、差異(もしくはA=B)が端的に対立することなどなかったんでしょね。意識でさえも、差異もしくは特殊なもの、無差別すなわち普遍的なものとの総合に基づいている以上、この二段組の思惟が意識を成就することなんかできませんし、いわんや、差異と無差別とを、特殊なものとの普遍的なものをぜったいてきに一たらしめているもの(A²)に到ることなんかありません。

著者：このような無知の傲慢、それも、その時代に深く根差していて、哲学を、一歩だけでなく、これまで前進してきたすべての歩みにわたって、すべての思弁の最初の把握でさえも疎遠に思える未熟の極致に引き戻そうとする、そうした無知の傲慢が自らを哲学として自慢できるなんていうことが、今、どうして起こったのか、またどうして可能なのか、とても答える気にならないよね。だけど、どうしてこの出来損ないが、私の体系に対処するのか、ということについて訊ねたいのなら、私はただ次のことだけをお答えしておきましょう。つまり、それは、極めてひどい二元論が、真の絶対的な同一性体系に対処するように、あるいは、まったくの桁違いの二つのものが対処しあうように、たとえば、つまらない、それもそのつまらなさにまたしても染まった脳によって合成され、へたくそのまま遂行された道化芝居が、芸の努力でもって構想されてその把握に従って遂行された仕事に対処するように、だつてね。

さらに、無限な多様性を持った素材と非同一性とを自らの外に自らと並べて前提しておいて、適用するにあたっては、そうした素材で持つて繋ぎ併せなくてはならないような同一性が、どうして絶対的な同一性だと呼ばれることができるのか、さらに洞察されないうままであるなら、ラインホルトとその共犯者には、彼らがこうしたことを思いついてやっているのであつて、彼らに然るべき言葉が将来的に慎まれることがあつてはならないという法律上の手段をほのめかすしか、残されていないよね。

友人：僕の知っている情報が正しいなら、共犯者がそれを用いていたのでは全然なくて、むしろラインホルトがそれを我が物としていたようだよ。

著者：シェークスピアでは、ここにまったく当てはまるものがこう言われているよ。彼はその言葉を誰か利口な人から聞いて、馬鹿に適用したのだ、つて（*）——なぜなら、師匠のほうで、それについて何か気付いていた、と

私には思えないからね。

(*) シェークスピア『お気に召すまま』四幕一場

友人：それじゃあ、あなたは結局のところ、『第一論理学綱要』を読んだの？

著者：読んだってほどじゃないけれど、目を通したというよりはまだまだしかな。ちょうど、彼がどんな人かを言うのに必要なだけね。去る一八〇一年の夏以来のことだけだ。**[150]**

友人：学者にふさわしい、と思われる以上に、あなたはこの点で大きな怠慢を犯してしまったということを、少なくとも認めなくちゃいけないんじゃないかな。だって、その書物がいかなる性質のものであれ、少なくともその書物が騒がれたからこそ、それを読んだに違いないんだから。

著者：最高の友よ。バルデイリの『第一論理学綱要』について騒いでいるただ一人の男に関しては、この男について、私は自分の理念を定めていましたし、彼についてどう考えなきゃいけないかということも弁えていました。だけど、これでは十分な根拠じゃないんでしょうね。でも、あなたに知ってもらいたいことがあるんだなあ。つまりバルデイリに関しては、私はずっと昔からこの人を良く知っているんだよ(*)、それに、彼が以前、哲学で失敗してしまつてね、この前著した小さな試論でも、何も注目を集めなかつた後、やつと『第一論理学綱要』によって、暗中模索から這い上がつて仕事をしようとする努力したつても知つているんだ。——おそらく、あなた自身の目にもとまつたんじゃないかな、『意志自由の概念の起源』とか、『形而上学一般の起源についてのある書簡』とかという標題の冊子がさ。

(*) バルデイリはシェリングのいとこであつた。

友人：そんなの、聞いたことがありますんでした。

著者：私に、著者自身がそれを送りつけてこなかったなら、それらは多分、私にとつても知られないままだったでしょう。これら二つの著作だけで、その筆者の精神能力について、かなりはつきりと把握できるでしょう。彼は、私がそんな人を見たことがないほどまでに、すっかり経験的心理学にとりつかれているのです。つまり、彼は、何か思弁的なものが存在するということが見えないまま、一切の予感を欠いていて、ある理念を思いつくと、すぐさまそれを、経験的心理学から説明することを始めるつてわけで、こうした経験的心理学なんでものの实在性を疑うことを誰も思いつかなかつたかのようなんです。こうしてたとえば、先の著作にあつて、意志自由の理念は、彼にとつてまったく完全に、真理学的な迷妄によつて説明されているんだね。

友人：彼が観念論を、経験的心理学のように正そうつていうのも、不思議な話ではないつてことだね。

著者：まったくそうなんだ。バルデイリは、彼の経験的心理学に基づいて、観念論に叱り付けるように反駁しさえしているんだね。一言で言うと、最もひどくて最も深い経験に沈みこんで溺れてしまつて、一切の思弁的なものについてはそうした暗闇で打ちかかつて、その結果、自らの経験的心理学については決して分かつてもらえない湯に説明しなかつた男としてしか、彼を見てきませんでした。こうした悪いことに、また二つの別のことが付け加わるのです。つまり、皮相な能書家ぶり、その点で彼はとりわけ何人かの英雄を手本としていたんです、それと、哲学を、その歴史によつて学ぼうとするんだけれど、この歴史を経験的心理学で助けようとする志向です。その結果、経験から始まつた円環はまた経験へと閉じるわけで、そこには何も出口は残されていません。【151】

そのような浅薄な本性の持ち主が、いわばまだ自らを高めることのできた最高のものつて、ラインホルト流の實質と形式の理論だったのはもちろんです。それですから私は、ラインホルトの根元哲学の末流たる『第一論理学綱

要』について聞いた時、まして著者をそれ以外にも人間として知っていた以上、はつきりと納得したわけです。

——ひどい味噌漉し頭だよ。お好きなのは

およそ他人のお残り、ゴミ屑、廃れ物

とにかくいい加減使い古されてしまった時分に

猿真似して、それでも当人は

新流行気取りなんだから面白い（*）

こうしたことすべて分かっている、私が『第一論理学綱要』が実在していることを聞いた時、そして『綱要』を手に入れることができた時（この二つは『綱要』が出版されて後、かなり経ってから生じたのですが）、少なくとも本を読むとすることの妨げにはなり得ませんでした。そしてまた、あとになって確認されたことであって、予め表象することもできていましたが、次のように理解する妨げにもなり得ませんでした。つまり、バルデイリのその著作にあつて眼中にあつたのは、学問の関心よりも、あるやましい心の動きを充足させることだったということ、とりわけ私に対する極めて些細な憎しみを片付けたということ、機構（Mechanismus）と有機体（Organismus）についての理念を、まったくはつきりと私から借用していることへの感謝のしるしとして、彼は、その理念を利用しているその同じ文脈で、その理念を取ってきた原著者に合えて言及して、あえて最も通俗的な人格性を爆発させた（*）ということ、そして余りに自分のくだらないことをくだらないと入れあげた結果、ある箇所、ひとりの馬鹿な男が『エアランゲン文芸新聞』の知識欄で、その新聞が第一編集者の指導のもとにあるながら、お喋り小屋の格好の見本となっていたもんだから、私のことを万能の天才とかなんとか、そうしたものだと呼んでいたことについて（**）、自らの感受性を披瀝した、という経緯はわかっていたんだけどね。これ

らすべてのことが、本を読もうという気にさせないものであったにもかかわらず、むしろ、私の興味を引くことになつたわけです。

なぜって、第一に、憎しみは非常にしばしば精神の欠乏を代償するということ、第二に、神は不名誉な器を、その中に、世界のために何か良いものを入れるために選び出すなんてことも珍しくない、つてことが明らかだからです。それでもなければ、他でもない、泥や汚物に辿り着く流れの中に砂金が散らばっていることを創造することもできますし、とりわけ、その流れが流れ下りながら洗ってきたことを知っているならばね。だけど、著作のすべてを読まなくてもいいように思えるのは、（私はお話を続けたいと思いますので）こういうことなのです。

一八〇〇年の夏、私は著者自身と個人的に話をしたのです。直接会うことは、私が確信するために必要だったというのではないのですけれど、この人個人のうちに現われていた不合理性の深淵というものへ、すっかり目を奪われたものでした。誓って、その話の、まことに正確でない特徴をなら挙げませんし、たとえ多くの無意味な挿話が抜け落ちていたにしても、それについても私は言及しますし、主要な事柄、それも内容的に大事な事柄は、私が挙げるのとまったく同じ性質のものでした。あなた自身で判断してくださいでしょうか、私たちの会話に、この小さな情景を加えてもいいよね。

(*) シェークスピア『ジュリアス・シーザー』四幕一場（アントニーの言葉）中野好夫訳

(**) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik, S. 174□176 「(思惟において) 前提された有機体を欠いた機構が考えられないのは、延長を欠いた延長されたものが考えられないのと同じことである。(この後者の命題によって機構は有機体を前提する、あるいはたの言葉で言い換えるなら、機構は有機体によって初めて可能にされるのである。この命題に私は、既に長いあいだ固執していたが、結局私は、それにつ

いて私の書きとめた多くのことを、最も偉大なドイツの自然研究者の一人に理解してもらえように送った。今、私は、その命題を自らに對して少ない言葉で証明できる。) カント哲学を、より高次の、すなわちその第一のものを備えている自然学に適用しようとして、諸原理を掴まえたと思ひ込み、素材において、そして直観のもとで手探りしながら探し、したがって、あらゆる場合に(さて、世人は、見捨てられた自分のための山のような軍隊の代わりに、今なおも、前途有望なことに、世界霊という看板を掲げるのである) 空しい力から始め、空しい力で終わるならば、その紛糾はなんと底なしのものになるに違いない——私は言う、その紛糾はなんと底なしのものになるに違いないということとは明らかである。(残念なことに、私がここで念頭に置いている著述家は、生まれながらの学者それ自体を墮落させ、そしてその進んだ人生行路において彼は、単に口真似をして、それも大袈裟に、そしてそれだからこそ背理に陥つたのである。この領域で彼の目を介してであろうと、他人の目を介してであろうと、それを中途半端に見ることは、見えないことよりも悪い。たとえば『自然の哲学への理念』の二二八頁以下、『マテリーの概念の起源について』のとりわけ一三一、一三九、一四〇、一四一頁で主張されていることを参照されたい。すると理性的な人間がそこに意味を見出すのなら、私は何も言わなかったかもしれない。

(***) こういった方向のあてつけは、バルデイリが『第一論理学綱要』九三頁以下でやっている。當時の『エアランゲン文芸新聞』一七九九年一月一二日付け第二号の「知識欄」は、九頁以降の雑報欄の下で、シェリングについてのエピソードを載せている。このお喋りな話の最初の文章は次のようになっていゝ。「シェリング氏、今やこの異能なイエーナ大学の哲学教授は、我々の卓越した頭腦の持ち主の一人、ほとんどすべてのものを自己自身によって生じさせる真の万能の天才である」(GW. IV, S. 582)。

私：（観念論者の〈主観—客観性〉が明白な個性性であつて、純粹な同一性（これは、主観と客観との同一性ではないと言ふべきでしょう）から彼は出発する、と私に彼が断言したあとで、〈端的に限定するもの〉にして〈ありとあらゆる限定の原因〉としての同一性は、素材に作用するのかどうか、ということが彼にとつて問題になったのです。）

あなたはこの素材をどうお考えになりますか？ 明らかに空間のうちにあると？ 【152】

彼：確かに。だつて、空間から独立している素材なんて思い浮かべることができないからね。

私：素材が空間を満たしているとも、想定なさるのですか？

彼：（躊躇する）

私：あなたがこのように想定なさるのでなければ、あなたは、空間そのものから素材を区別することができませんよ。

彼：素材は空間も満たしていなければなりません。

私：明らかに、三つの次元すべてに従つてですか？

彼：それ以外にありますか？（私はまだ、彼が『第一論理学綱要』の一一六頁で次のように言つていたのをまだ知らなかったのです。「この延長がその本質を、物体に即して、三つの空間の次元において展示すること、これを我々は、確かに、この物体そのものを見つめることによつて初めて経験するのです」(*)。

私：私たちが他の人たちに、マテリーをその三つの次元もろとも演繹するという労苦を続けさせないにもかかわらず、あなたはこれをすべて無益なことに持つことができるし、前提することができるのですから、なんと幸せなことでしょう。—— だけど、あなたはどんな空間の充実などというものをも考えることができずに、むしろ、

それぞれの空間の充実を、必ずや、一定の規定されたものとして考えたてはならないのです。そこであなたは、空間を充実させる素材が、空間を、ただ一般的に充実させると考えることなんかできないわけで、むしろ必然的に、素材が空間を一定程度だけ充実させるというように考えなくてはならないわけです。

彼：（一定程度の空間の充実というのが何を意味しているのか——これを彼は、空間の外延的な量と混同している——相変わらず、疑わしそくに、実際に知らないのか、それとも知らない振りをしているのか。この偉大な哲学者には、両者の区別について、へ空気と鉛の外延的に等しい大きさの割り当ては、空間を内包的に違うように充実させる）という例によって説明しなければならなかった。

これについては、素材が空間を限りない多様性でもって充実させる、としか言うことができません。

私：あなたが限りない多様性を措定するのなら、あなたは、限りなく区別することが出来るということ的前提しているのであって、これはまた、無限の規定性を前提するのです。そこであなたは、空間を充実させる程度という無限な規定性だけでなく、諸規定性の無限性をも持つわけです。さてあなたによると、素材におけるありとあらゆる限定が、素材へ同一性が影響することによってようやく措定されるというのなら、これらの規定性のすべては、どのようにして、素材としての素材に入り込んでいのでしょうか？ **[153]**

彼：（さまざま言い回しによって、この点を凌ごうと試みましたが、絶えず繰り返して、そこへと戻るのです）。そして、彼は、素材としての素材における多くの規定性を、規定するものから独立的に想定して、それゆえ、思惟の外にそして思惟の前に思惟を想定して、そこで純然たる不合理性を想定しているのだ、ということが繰り返されて分かるようになったあげく、彼はそれ以上、何も持ち出しようがないので、彼のほうから、会話全体は終わりと成ります——笑いながら）

私：哲学において、まさに呑気にやってゆこうとするなら、あなたの側に立たなければならぬことを、お認めになりますよね。だって私は、あなたが、素材だけでなく、空間を、空間を充実させる三つの次元を、いやそれどころか、空間を充実させるさまざまな程度の限らない量さえをも、ありとあらゆる思惟の前で、ありとあらゆる思惟から独立させていることが分かりましたから。一言で言うと、あなたは、私たちや他の人たちが止めることをむしろ始めているのであって、こうしたやり方でまったく自然に、お続けになることができるのですねえ、云々。彼：（先のように笑い続けて、これをもって歓談を終える。）

(*) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik, S. 116f. 「しかし、この延長がその本質を、物体に即した三つの空間の次元において展示する、ということを我々は、出来上がった、すなわち思惟に到達した人間として、Aと結び付けられた、それゆえ、既に思惟へと移されたこれらの物体そのものを見ることによつて初めて、経験するのである」。

友人：こうした心の動きは分からんわけでもないなあ。

著者：さて、私はこうして欺かれた男に同情してはいけなかつたのかな。この男は、自分の愚かさを知恵だと、自分が生徒として把握したものを理念だと、自分が剽窃してきた練習問題を、まったく新たな哲学だと、自分のつぎはぎ細工を傑作だと、自分でそう思ったというよりもむしろ、他のおつむの弱い者によって、そのように思い込まされたわけですね。その他にも、同情の余地に属するのは、ラインホルトが実際には問題を真面目に続けてゆくつもりであったという経験、さらには多くの友人たちの所見といったところでしょう。友人は、ラインホルトの用いた始めた武器、それも多くの友人にとっては重要なものと思われるよりも有害と思われるような武器が、外的な顧慮

しか払われなかったがために、必然的に、私たちの側で防御体制に入るとともに、彼の問題の叙述になり得た結果、結局は書物を採し出して、それを単に表面的に通読する以上のことを私がするようになった、ということを見たわけです。

友人：この機会に、それについてのあなたの考えを聞けるなんて、非常に有り難いことではあるんだけど。

著者：今、まさにそれについて私に思いつくだけ、喜んであなたのお役に立ちましょう。その本全体を、私は、自然の救援として構成してきましたが、その本は、不幸な（そしてそうした時代にはまず避けることのできないような）やり方で、最も深い経験のために使命付けられていた頭脳の持ち主に、外から若干の思弁的な理念が入り込んできたことによつて、必要とであつたわけです。それらの理念は、経験的心理学の用語で言うなら同化されるまで、フレムトな素材として耐えることができなかつたわけで、こうしたやり方でその頭脳の独自の組成にまたも馴染んでしまつたわけです。【154】ですから、理念は、脳の畸形的な腫瘍となつたわけだね。だからその本は、経験的心理学を併せ吞まされて、ラインホルトの根元哲学、カントの批判哲学、それに学校の授業で教つた幾つかの体系から採られた少しの混乱した理念によつて狂わされて、その秩序を掻き乱された魂の器官に、観念論が影響を及ぼすことによつて形成されたのです。その魂の器官なんて、こうした育ちを通して健康になるように自らを再構成することを求めた結果、私たちはしばしば見るように、救いに満ちた自然が内的な悪を外的な怪物へと吐き出しているってことですよ。

異種の構成要素が一緒になつている合成物を把握する化学過程は判明に分かることですけど、そのすべての分解、沈殿、そして結晶化において、一切の付け加えとか若干の主観の関与とかをすべて欠いたまま進捗するのであつて、そしてその限りで、実際には、純粹に客観的な自然現象なのです。

友人：こうしたことに關して僕に注目すべきことだと思われるのは、次のことなんだ。つまり、目下の氣の抜けた味気ない主体の話に従つて判断すると、過程は実際には期待された作用を持つていたということ、そして味気のないひ弱なラインホルトの魂は、今まさしく急性の熱病に罹り始めたというのに、バルデイリにあつては、熱が冷めてゐる。その結果、バルデイリは意識を回復したのに対して、ラインホルトは酔つ払つた状態のまま、こうした運命においては、自分の主人が走り狂うのを止めたところからすぐに、すべて自分の愚行だと考え始める、単純だけれどより賢くてより有名なサンチョ・パンサに似ていなくもない、ということですね。

著者：化学的な原因や反応薬の稀少な合成によつてもたらされる驚くべき結晶化作用とか、境地である外部の水分が内的な形成衝動を不合理な形に押し込めて出来た奇怪な海の生物を見て楽しむのと同じように、この場合、子の人においては、単にそうした珍しさだけでなく、デカルトの松果腺以来、著者の言う鳥の自我(*)に到るまでのこのかた、ありとあらゆる不合理な形や癒着の完全なコレクションや、いわば博物標本室をたのしむことができるよ。

そうした良く分からない多くのものうちに、何か純粋なエレメントを認識することなど難しいにしても、それらを動かしている主たる酵素は観念論から手に入れたものであつて、そうしたものや、ほとんど水脈が見えはしないけれど、哲学から全体を通じて流れているものは、(私が間違つていないなら、著者はいろいろ混ざつた種類の愚か者だと既に所見を述べてきたわけだから)観念論者たちから聞き出して、自分のものにした理念であるということが分かつと思ふよ。例えば、彼が観念論者たちから理解したことは、こうしたことなんだ。つまり、哲学することは、無制約なものから、従つて単に同一律の下に存しているものから無媒介的に始まる、そして単に総合的な性質であるものはすべて、この無制約なものによつて否定されなくてはならない、つまり、同一性の原理は、ただ

カントにおけるような真理の否定的な基準であるだけでなく、肯定的な原理である、ということだよ。——同一律は、フイヒテがまずは「エーネジデムス批評」で、あとになって『全知識学の基礎』の最初の方で、カントの被制約性を乗り越えて、哲学を絶対的なものへと進めた命題です。バルデイリはまた、『全知識学の基礎』の第一節から、[155] A II Aにおいて本来考えられているものは、Aそのものではなく、あるいは主語や述語としてのAではなく、必然的な連関（コブラ）、一言で言うと、同一性そのものである、ということを知ったんだね。

あのさあ、それまで無知ななかにも純朴に生きていた人たちが、いわば偶然的な仕方ですらわずかな光がもたらされただけで、自分自身についてそれほど不思議に思うことなく、自らのうちの稀なる天分を褒め称えることがあり得るという経験にしばしば出合うよね。それと同じように、この領域ではあらゆることがフレムトでまったく新しくかった私たちの著者は、初めて経験主義を超える何かを理解したので、自己自身の前の塵へと、深くは崩れ落ちなかつたわけですね（二九六頁）（*）。そしてこうした驚くような動きが、ラインホルトにとつては、これまで決して克服することのできなかつた極めて複雑な経験主義の状況において生じたので、ラインホルトが、こうした同じ動きを機械的に、あとになってから、しかも今なおずっと遅れてやり続けているということは一種の必然だつたんです。

だけど、すべての藝術や学問にあつては、それもとりわけ哲学においては、他人から借りてきた翼では遠くへ飛べないものですから、あの男、バルデイリは、本当の無制約なものに、そして最高の同一性のエーテルに自らを高めようとして駄目だったあと、すぐに、ラインホルト的な素材に、つまり腐った哲学の澱んだドブに戻って沈んだ、というわけだね。一切の客観性や主観性を超えて（といつても、双方の絶対的な同一性へ、ではなく）突き進もうとするラインホルトの側から下された断言（Versicherung）は、そのものとしては、なるほど純粹な同一性では

ある最も深い主観性へと、すなわち素材を自らに対立しているものとして持つだけでなく、前提している「思惟としての思惟」へと、彼らが墮落している点で解消されてしまったのです。素材がまったく限らない多様性として規定されるので、彼らは、存在を、しかも語られた会話から明らかなように、まったく出来上がった経験的な存在を、思惟の前でそして思惟の外で、思惟のありとあらゆる規定とともに措定するわけで、ですから自己自身に矛盾している思惟を措定しているんだということ、さらには、「思惟としての思惟」というのは、そのいわゆる絶対性を損ないこそしないものの、同時に制限されたものとしてあるわけだから、徹頭徹尾、必然的に、その「思惟としての思惟」に対立して、かつそれから独立的に前提されているものに、自らを合わせているものでしかなく、それ自身もはや思惟ではなく、むしろ純然たる非思惟だということ、こうしたことは、この無邪気な哲学的営為に思い浮かぶことのなかった考えつてわけだよ。定式化される哲学のような、浅薄な哲学が中途半端な思索をその本質としているのは、限らない多様性であるような想像上のもの (Enta. imaginations) がふさわしいようなドイツのお喋りのため、つてもんだらうね。こういった多様性は、思惟以前の限らない規定性として、実際に考えられることができないうし、また、中途半端な形でも、何らかの直観に思い浮かべることさえできません。フイヒテが登場してきた後の時期に、そうしたお喋りはすぐに消えてしまうことになって、誰も、ラインホルトだって、そうしたことを聞くことはなくなっていたのに。素材とその限らない多様性との諸命題、つまり形式が付け加わるなどして生じる統一の諸命題なんでものが、今またしても新しいものとして持ち出されて、示されることが許されていることは、逆に、それらの命題が信じられないような速さで忘れ去られてしまっているかを物語るものでしかありません。思惟と素材とは、その全系列にわたって、初めとまったく同じように硬直して対立したままです。双方は、等しいわけがない二つの世界において、何ものによっても合一されないまま、相互に並存しているわけです。それにもかか

わらず、思惟もしくは同一性は素材に働きかける一方で、(三一九頁によれば)思惟を素材が触発するつてことですから、ここに【156】頭脳を経験論へ再構成することの出来上がり。私たちが持っているのは、ラインホルトの根元哲学と一つになった自然哲学の影響であつて、二つが一緒になるとさあ、かつて哲学のうちに存在していた二元論のどれよりも粗雑な二元論となるんだね、これが。双方が接合し合うやり方に関しては、こういうことなんじゃないかな。たとえ素材が最高の非同一性、無限な多様性であるにしても、それはいまいまいましい原基だと考えられなくてはなりません。それにもかかわらず、素材が考えられるためには、素材としては無化されなくてはなりません。こうしたことが、経験的心理学の立場に基づいた、師匠にまったくよく似ているように見える意味深い所見でもつて、実例だとされるわけです。「語られた言葉、ならびに書かれた言葉は、たとえば聞かれたり読まれたりする際に、そこから思想がせいせいするのだというのなら、マテリアルとしては無化されなければならない」(***)。——だけど、素材は全部、消耗されるといふのです。言ってみれば、ここで残っているものが、カントの純粹直観の箇所に書き込まれるわけで、それは根絶できない、もう一度、相互並存と継起とへ分解する相互外在の形式です。この形式は存続して、思惟にまで接合するわけです。——え、どうしてかつて? ——あゝあつ、ここでまさしく出来上がった自然法則が然るべき箇所で生成していないというおめでたい哲学なんだ。だって、自然法則に従うなら、形式が形式によつて破壊されていることなんかないからね。だけど、不合理の極みに達しないことにならないように、つてためなのかねえ、素材は、それがへ思惟としての思惟へから独立していて、前提されているなかで確認されるつてわけさ。そのへ思惟としての思惟へは、一切の本質の本質へ、そして神性そのものへ転化していったんだ。ところが、その同じ呼吸で、神が素材を創造したということはまたしてもあり得ると見なされているんですから(二五六頁)。こうしたことをどうでも良いことに対しても矛盾が存在するようにと、神は、次第次第に書き上

げられて、たとえ素材を眼前に見出すことが可能であっても（上記の頁）、それにもかかわらず、ありとあらゆる可能性や現実性の根拠として樹照られるわけです。

結局、全著作のまとめとしてイメージを与えるべきだということでしたら、私の見るところ、もし彼の書きものを急いで他のものに準えることが許されるのなら、著者の他には、あのウベダの画家ほど、こうした手法を真似している完全な似姿はありません。この画家について、セルヴァンテスは、彼の『ドン・キホーテ』第三部で語っているのですが、その画家は、人から何を描いているのですかと尋ねられた時、へそなうてゐるものとか、へ出来上がったものとかと答えたんだね。また彼が、いわば雄鶏を描いていた時には、誰もそれを狐とか白鳥とかだと見なさないように、その下に、これは雄鶏です、と書いたつてわけさ。

著作の雄弁さに関しては、特に著者が神の現存在を求めて語るようになる箇所や、独断的な形而上学要覧の古い埃をもう一度全部たたき出す箇所では、そうでもなければ、カプチン会士の説教にあつて讚えることを常としていたような、パトスや力にまで高まつているよ。それに対してまた私には、ラインホルトは、フランスの以前の強き精神の下に集つた何人かの人たちに似ていなくもないように思われるんだ。彼らは、生活の中で、一般的な自由の精神に夢中になつて、既存の宗教に吐き気を催した拳句、臨終の床では結局、汚いカプチン会士のお説教の世話になつて喜んだんだつて。だけど、あのバルデイリは今、平安のうちにやすらつていれればいいさ。彼の愚かさの混乱した概念から彼を清めてやることを自らに引き受ける剽窃者、まあ、世の中のそうした良き剽窃者のみんなが、こうしたことをしている訳ではないんだけどさ、そうした剽窃者を彼が見つけていたからには、私たちが、平和に戻るような気になるのは難しいよね。だから、私たちの対象に戻ることをお願いしたいんだけど。【55】私たちは、そこからまったく脱線してしまつたからね。そして、もつともつと、あなたの報告を続けてほしいんだけ

れど。だって、この報告は、まだまだ私たちに面白い動向と楽しい比較を示してくれるだろうからね。

(*) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 99 (シェリング格によってカント、フイヒテ哲学が繼承されることに反対する文脈)「もちろん、次のように考えてもいいだろう。つまり、動物たちの光景は、最近の哲学者たちに、へ並存や相互繼起的に表象されることは、人間の自我においてあり得ることだけではなく、動物の生での意識において、それゆえ、馬の自我などにおいてもあり得ることだ」と既に確信させていなければならなかったのに。ちょうど私が、不思議なことではあるが、表象されるべき時に初めて、彼らの一人に注目して、こたわらなければならぬように。しかし、この確信は単に経験的であつて、眞の哲学においてはそうでなければならぬのとは違い、一目瞭然とした超越論的な起源ではなかつたであらうに」。

(**) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 295f. 「これらの存在者の諸段階の形式は、ピユタゴラスによつて(おそらく東洋に由来している)数の下で考案され、ライブニッツの気高い精神によつて再び励起されたが、彼とともに空中現象的には消滅していく同一律の認識が、思惟の認識が、したがつて哲学が、人間のもとに存続する限り、存続するであらう。こうしたことを私は知っている。そして塵へと崩れ落ちる、こうしたことについて、たとえ人間が私の灰と私の父の灰とをもう一度混ぜ合わせても、人々には、かつて私は生きていた、と言つて欲しいものだ」。

(**) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 67 「思惟としての思惟は、マテリーとしてのマテリーを無化しなければならない。さもなければ、マテリーということで、なんらかのもの、すなわち何か考えられたものにまでならないことになる。／さて、語られた言葉、ならびに書かれた言葉は、たとえ

ば、聞かれたり読まれたりする際に、そこから思想が生成するのだというのなら、マテリーとしては無化されなければならない」。

友人：もちろん喜んで。だつて僕らがこの対象に立ち入って行けば行くほど、ますます魅力的になつてくるように思われるからね。そこでラインホルトは、師匠の発見したことのなかに、とりわけ、〈思惟としての思惟〉を顧慮したうえで、量、質、そして様相の、相違のすべてという否定態を算入しているんだね。

著者：このことは、私たちが絶対的自我、主観と客観との絶対的同一性と呼んでいたものを、彼が〈思惟としての思惟〉と呼ぶという、いわば工夫をしていた限りでは、もちろん正しいのです。なぜつて、カントの全哲学は、〈量、質などからいつて区別される諸概念、つまり単に諸現象によつては、自体的にあるものは、規定されない〉というあの否定的な結果においてこそ存立しているのですが、そのカントについて今、何も言わないなら、真の絶対的なものであれ、憶測された絶対的なものであれ、そうした絶対的なものを性格づけるこの否定的なやり方こそ、たとえば私自身が『哲学の原理としての自我について』でやっていたように、哲学における初学者なら誰だつて先ず選び取るやり方ですからね。「絶対的自我（＝主観と客観との絶対的同一性）にとつては、可能性も現実性も必然性もない」（*）と、ある箇所を書いてあるけどね。そうした絶対的自我については、このやり方で、一切の反省の対立命題や総合は拒まれていくわけだよ。——その著書の別な箇所で言われているところでは、「絶対的自我にとつては、そもそも可能性と現実性が存在するのであれば、あらゆる可能性が現実性であり、あらゆる現実性が可能性であることになろう。しかし、有限な自我にとつては、可能性も現実性も存在する。したがつて、有限な自我の努力は（そして連関から明らかになるように、有限な自我の現存在も）、絶対的自我の存在に關して可能性と現

実性とが生起したというのなら、絶対的自我の存在が規定されたであろうように、可能性と現実性との双方との関連で規定されていなければならない」(**)。「絶対的自我にとつては、絶対的・一致であるものは、有限な自我にとつては作り出せられた一致である」(***)。ここで明らかにされる主張は、次のようなことです。つまり、絶対的なものの本性は、反省において対立しているものの統一によって規定されなければならない、ただし、この統一の概念からは、反省の総合がもたらすもの、すなわち反対命題に因る制約はさつびかれる、したがって、統一は、作られたり合成されたりした統一としてではなく、絶対的な統一として、たとえば、可能性や現実性によって制約されたものである限りの必然性としてではなく、可能性や現実性を超えて、むしろそれらを制約しているものであり限りの必然性として、一言で言うると、神聖な必然性として、神聖な同一性として考えられる、という主張です。

さて、それについてあの男は、観念論者たちの著書からある程度は何らかのことを把握して、学んだようで、絶対的なものをへ思惟としての思惟と呼んだんだね。そして自分の思想について、ラインホルト流の素材、すなわち経験的心理学、二元論を付け加えて、自分の思想のゴツタ煮をかきまぜたってわけさ。【18】

(*) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.I, S. 156 「絶対的自我にとつては、可能性も現実性も必然性もない」。

(**) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.I, S. 156 「無限な自我にとつては、つまりそもそも可能性と現実性とが存在するのであれば、あらゆる可能性が現実性であり、あらゆる現実性が可能性であることになろう。しかし、有限な自我にとつては、可能性も現実性も存在する。したがって、有限な自我の努力は、可能性や現実性との関連で、ちょうど、可能性と現実性とに関わっていたとすると、無限な自我の存在が規定されたであろうように、規定されなければならない」。

(***) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.I, S. 166.

友人：たぶんあなたは、もつと個々の検証を面白がると思うよ。ここにそうしたものがああるよ。「絶対的同一性は、同一性としては、——連関から分かるように、どんなやり方でも自らを超出したものとは考えられ得ない限りは——決してアウフヘーベンされ得ない」(*)というあなたの命題はね、「へ思惟としての思惟」はなんら質の区別を蒙らない、へ思惟としての思惟へにおいては何ら否定態は存在しない」(*)という命題にまとめられるってわけさ。僕には前の命題こそ、最も直接的に、この二元論に対立している命題の一つだと思われるけどね。こうした(ラインホルト流の)二元論は、絶対的同一性そのものではなくて、むしろそれにまさしく対立しているもの、すなわち多様性であるところの素材に基づいて、絶対的同一性が自己自身を超出することをなんら悪いと思っていないんだよ。

(*) F.W.J.Schelling : Werke, BdIII, S. 15

(**) C.L.Reinhold : Beyträge, H. 3, S. 172

著者：絶対的同一性が自己自身を超えることを否定することについては、この二元論ではほとんど考えられていないよね。——むしろ、この二元論は、こうした超出について、実に明白な説明を与えることができるつもりになっているということについては、不幸なやり方で、非常にはつきりとした箇所が基本テキストにあるね。一一四頁だよ。「あの一、へ思惟としての思惟」を適用できるためには、一つのプラスが、それゆえ何ものが付け加わらなければならぬ(ここで私たちがおしまいに出来ていたら良かっただろうに。だけど、もつといいものが続くよ)。この何らかのものがもう一度、あの一そのものではあり得ないのは、もしそうでなかったなら、あの一はプラスではなく、単に自分自身をもう一度持つだけになっただろうから」(*)。(まあ、そうだよね)「しかし、この何もの

絶対的な同一性—体系、ならびにそれと最近の(ラインホルト流の)二元論との関係について

かは、あの一がこの何らかのものを受容し得るといふ性質を持つていなければならぬ。そうでなければ、いったいどうやって、あの一とこの何らかのものを一緒にしたのであるうか。この何らかのものが一であったとしても、あの一でなかつたとしたら、それらは適合することが許されただろうか。この何らかのものがたとえば素材だとして、すると素材が一つの形式を持つ、この形式が根絶されず、あの一が素材における一切のものをその形式に到るまで無化することができたのなら、あの一は、この何らかのものを、ある一にすることができたであろうに。なぜなら、どんな形式も、他のものをもはや無化することができないからである。そこで我々は、1+1を持つたであろう。すなわち、我々は、我々の2へと脱け出したであろうに、云々（**）。——その気があるなら、もつと読んでみたらいいよ。私たちは、あの一とこの何らかのものを、心底楽しみながら、擦り合わせて、適合させてみようよ。

(*) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 114

(**) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 114f.

友人：別のことも聞いてみて。絶対的同一性に関していかなる量的差別も考えられない（*）、そして、絶対的同一性はただ主観的なものと客観的なものとの量的無差別という形式の下でのみ存する（**）という命題は、へ思惟としての思惟へはいかなる量的差別も蒙らない（**）という、僕にはまるで見当はずれのように思える命題に等置されるんだよ。

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd.III. S. 21 「二五節 絶対的同一性に関して、いかなる量的差別も考え

られなく」。

(**) Ebenda. S. 24 「三一節 絶対的同一性は、ただ主観的なものと客観的なものとの量的無差別（それゆえ認識と存在）という形式の下でのみ存在する」。

(**) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 172

著者：ユークリッドの命題に対するある算術家の陳腐な言葉みたいだね。量的差別について、先ず言うためにはさあ、そんな陳腐な言葉についてはまったく問題にならないよ。【159】だって、そんな言葉は、質的な差別を、だから絶対的な差別を、限らない多様性において持っているからね。いわんや、量的無差別について話しにならないのは、言うまでもありません。だって、彼らは、自分たちの絶対的な、すなわち一面においては力を奪われてしまった同一性しか知っていないんですもの。そんな命題に拠れば、私は質的無差別の一切の表象に、先ずもって反対することになったでしょう。つまり、質的無差別に従うなら、絶対的なものは、同じ方法で、というよりむしろ同時に、認識にして存在、理念的にして実在的なのです。その際に私がかつきりと念頭に置いていたのは、『スピノザ書簡』におけるヤコービの諸命題です。「（思想と延長との）双方は、一緒になって、ただ不可分の本質だけを構成する。その結果、これらの性質のどちらか一方で神は考えられるか、などということは、没交渉的（無差別）である」(*)。さらに、「思惟がそのものとして考察されるなら、スピノザによれば、延長に属さないのは、ちようど、延長がそのものとして考察されるなら思惟に属さないのと同じである。むしろ、双方は、一にして同じ不可分の本質の（等しく無限な）性質なので、合一されて、唯一にして一つのものになるのである」(『スピノザ書簡』一八三頁、一九一頁)(**)。二つの等しく無限な特性が、相互に実在的に区別され得ない以上、ヤコービが別の箇所で言っていることが、ここで現れている。それを私も同じように考えているんだね。この神（スピノザ的な神）の

統一は、区別されるべきではないものの同一性に存立して、だから一種の数多性を排除しないものなんだ（原注）。この区別されるべきではないものの統一こそ、私が量的無差別と呼んでいるものさ。だから私は、個々である領域にいるんだけど、私に続いてこの領域に入ることなんかラインホルトにはできないってことなんだね。

(*) Jacobi : Werke. Bd.IV-1. S. 183 (Wissenschaftliche Buchgesellschaft)

(**) Jacobi : Werke. Bd.IV-1. S. 190 Anm.

（原注）『批判主義の企てについて云々』という（ヤコービの）論説（一）におけるような気の抜けた装飾品は、哲学を、本質的な歩において後退させるべき定められている雑誌に載る資格を持っていることももちろん、その著者（ヤコービ）は、彼の友人ラインホルトの非本質についての本当の意見を、次の箇所で論証しないままにはしておかなかった。あの男（ラインホルト）がヤコービの本当の意見を、口を挟むことなく大目に見ていることは、それらの箇所では驚くべきことである。なぜなら、ラインホルトは、ヤコービの講述を自らのご丁寧な註でもって飾るほど厚かましいのだから。——四五頁「さて、私は一八年の長きに渡って把握しようとしてきたが、年々私にはますます把握できなくなってきたものがある。すなわち、統一が付け加わる多様なものと、多様なものが付け加わる統一とを、諸君はどうやって、表象することができなのか、あるいはこうした純粹な所与を、何らかの方法でどうやって考えることができるのか、ということである。しかし諸君は、このことではなく、多様性と統一との双方を、このように相互に前提するならば、多様性と統一とは、ただ相互にそして同時に、あらゆる思惟と存在の実体の形相として考えることができるように、相互に制約しあうのである。それから諸君の、ア・プリオリな（思惟としての思惟）から導かれた）織物全体から何が生じるのであろうか？」——九五頁「哲学は、量についてはプラ

トンから始まらなくてはならない。——個体の原理においては、多様なものと一者との秘密が不可分に結び合つて与えられている。すなわち、存在、実在性、実体が。それについての我々の概念は、純然たる相互概念である。統一は全体性を前提し、全体性は数多性を前提し、数多性は統一を前提する。それゆえ、統一はこの永遠の循環 (Zirkel) の端緒にして終焉なのであり、すなわち——個性性、有機体、客観——主観性と呼ばれる」(2)。(個々で観念論者の主観——客観性の改良として何が目論まれているか、ということとは簡単には言えない。)【160】

(1) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 45 = F.H.Jacobi : Werke. Bd. III. S. 112f.

(2) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 95f. = F.H.Jacobi : Werke. Bd. III. S. 175f.

友人：「理性を、主観的なものと客観的なものとの統一的な同一性として考えるためには、思惟するものとしての自分を捨象せよ」(*) というあなたの要求を、ラインホルトは、(へ思惟としての思惟を) 考えるためには、自我を、すなわちまさしく主観的なものと客観的なものとの同一性を捨象せよ(**) という要求と合流させた、ということ、僕は、もう少しで忘れるところだったよ。

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. III. S. 10 「理性を絶対的なものとして考えるためには、それゆえ、私の要求している立場に到達するためには、思惟する者は捨象されなければならない」。

(**) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 171f. 「絶対的同一性とか、へ思惟としての思惟を——絶対的同一性として考えることを、『まさしく他のものと一緒に具体化させずに、それゆえ、少なくとも存在を、とは言つても自我を、永遠にその際には除去するように』と、バル・デイリは彼の読者たちに要求したが、

シェリング氏も彼の読者たちに、「理性を絶対的なものとして考えるためには、それゆえ、彼の要求して
いる立場に到達するためには、思惟する者は捨象されなくてはならない」と要求している」。

著者：ここですぐに、馬鹿馬鹿しいことが目立つてもんだね。——あの箇所で言われていることはさ、まったく別の文脈なんだよ。問題になっているのは、少し前に引用された私の雑誌の原稿（第一巻第二分冊一一八頁）で示されているように、純粹理論的な哲学にとつては必然的な捨象だよ（原注）。この純粹理論的な哲学に関しては、その雑誌の他の箇所（第一巻第二分冊八五頁）で次のように言われています。つまり、純粹理論的に、ひとえに客観的に（すなわち、客観的な創作について語るような意味で）、主観的なものを一切混入させずに考えることを初めて学ぶことになるなら、このことは明白になるだろう、ってね。

（原注）ここで説明に供すべく、上述の二二三頁から次の箇所を掲げる。「観念論の体系においてさえ、私は、理論的な部門を仕上げるために、自我（主観的な主観—客観）を、その独自の直観から取り出して、知的直観における主観的なものを捨象しなければならぬ。つまり一言で言うなら、主観的なものを没意識的なものとして措定しなければならぬ。しかし、没意識的である限りの自我は、自我に等しいわけではない。なぜなら、自我は、自己自身をそうしたものとして認識する限り、主観—客観に他ならないからである」（一）。——ここで描かれている主観的なものの捨象は、それゆえ、純粹な主観—客観、つまり絶対的・自我に等しいもの、主観と客観との絶対的同一性への途である。

あの人たちが、自分たちの側なりに、客観的観念論について語ることを思いついた（『寄稿』第一分冊一三二頁）（二）ということは、ほんの注記しておくだけで十分かもしれない。ここで、上述の論稿の痕跡

を、認識すべきであった。——何らかの客観的観念論が存在するとしたら、私の体系の理論的部門において樹てられるものがそれである。なぜなら、あの人たちが今、合理的実在論と呼ぶところのものがそれでない、とうことは、彼らの馬鹿な断言がその証左に他なりません。つまり彼らの断言によれば、彼らの哲学は、再興されたプラトン主義とライプニッツ主義だというのであるが、反駁しようとする識者には、それだけで十分である。

(一) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.II, S. 722

(二) C.L.Reinhold : Beyträge, H. 1, S. 131f. 「ただ私のうちで一定程度まで実際に習慣的になっていた超越論的な感覚があったからこそ、しばらくのあいだ、私は次のことに気付かなかったのでした。つまり、超越論的観念論においては、決して「思惟としての思惟」が生起し得ないということ、超越論的観念論がこれにとって思惟だと称されるものを、実際には単なる主観的な行為にする、その限りで本来的には非思惟にする、ということ、そして、イデアという言葉がその昔からのプラトンの意味をもうとつくになくしているのになかったなら、(プラトンやライプニッツ、そしてバルデイリ野)合理的客観的観念論のいみしいものに、超越論的観念論が徹底的に矛盾する、ということ、こうしたことに気付かなかったのである」。

友人：ラインホルトの提起しているすばらしい質問があるよ。主観的なものを捨象したあとで、客観的なものを直ちに廃絶せしめる知的直観において、一切の主観性と客観性とが帰属するところのものがある以上、いったい何が客観的のまま、残されているのか、という質問なんだけど。つまりラインホルトは、あなたが知的直観そのものに

において、主観的—客観的なものを捨象していると表象しているんだ（*）。それを受けて、彼の追求している最もすばらしい注目に値するものは、双方の体系における哲学の立場は理性の立場なんだって。

（*）J.L.Reinhold : *Bevtrage*. H3, S. 179 「彼（シェリング）によれば、理性は、主観的なものとしての思惟するものと、客観的なものとしての思惟されたものとを捨象することによって、そしてこの捨象の後も残っていて、捨象によって際立たせられているものを反省することによって——絶対的なものとして考えられる。理性をそのようなものとして考えさせ、他のようには考えさせない思惟は、いわゆる捨象と反省であって、そして先の捨象の後も思惟において、思惟にとって残っていて、唯一反省されるところのものである」。

著者・ラインホルトがこうしたことを自分の立場について、賞賛できるように言いたいのですね。【161】
友人・哲学的な認識は、自体的にあるがままの諸事物の認識なんだそうだよ（*）。

（*）J.L.Reinhold : *Bevtrage*. H3, S. 173 「シェリングの体系とバルデイリの体系との双方において、哲学の立場は、理性の立場とよばれて、哲学的認識——純粹に理性的な認識やこういったものは——自体的にあるがままの諸事物の認識と呼ばれるのである」。

著者・確かに、プラトン以来、すべての本当の哲学者にあつてはそうなんだけど、ただ『第一論理学綱要』においては、そうしたことに付いて些かたりとも読み取れた記憶がないし、まして実際に見つけた覚えなんかないんだけどねえ。

友人：あなたにとつて理性とは何か、そしてあなたにとつて物自体とは何か、彼が経験できるためには、僕は、ラインホルトに、(ラインホルトの論稿「合理的實在論の境地の新たな叙述」(in: Beyträge. H3, S. 128ff.)で献辞が掲げられている) パウルス教授から、献辞への当然のお礼として、教授の編集した新たなスピノザの版を貰うように、助言でもしなさいいけないなあ。ラインホルトをその粗野な無知から救うためとあれば、学問の綱要だけを目にしてこの学者さんは、きつと喜んで本を贈ると思うよ。

著者：それから彼は、たぶんスピノザについて判断できることようになってたりして。

友人：それから、最後のくだりを聞いてみて。つまりあなたが師匠のように、あなたの体系においてポテンツによる表示を用いていることまで言及するほど(*)、彼は不遜なんだよ。

(*) CLReinhold : Beyträge. H3, S. 172f. 「バルデイリは、その全著作を通して、適用におけるへ思惟としての思惟の機能を表現するために、計算したり、大きさを測ったりする際の思惟の機能の通常の記号を、つまり等置(II)、肯定的なもの(十)、否定的なもの(一)、ポテンツなどを用いる。シェリング氏もまた、純粹に量的差異において存立するはずの絶対的同一性の存在の規定的な形式を表現するために、同じような数学的な表示を用いている」。

著者：このことを、むしろ彼の側での真面目さだと見なそうとするところでした。だって、純然たる事実に関わつて、純粹に事実に決められるこの点を、ラインホルトは自分の有利を理解して目指していたのだったら、触れるべきではなかったでしょうね。つまり、読むことができさえする人なら誰にでも証明されることですが、師匠には必ずや、次のような疑念が思い浮かんだに違いないよ。私からくすねて自分のものにしたにしても、すぐに私が

名前を挙げる他の人からくすねて自分のものにしたにしても、哲・学・一・般・に・お・け・る・ポ・テ・ン・ツという理念を、とはいえ、哲学におけるポテンツの規・定・的・な・概・念を、そして個・々・の・ポ・テ・ン・ツの規定を、とりわけ私から借りたのではないか、という疑念がさ。私の方法を適用するのは誰かとか、私の方法に匹敵するのは誰かとか、私の方法をただ不器用に真似するのは誰かとか、こうしたことは私にとってどうでも良いことではあり得ないにしても、そういう人は、私がそうであるからこそ、不正をこつそりと営むことができただけでしょうね。だけど今となつては、私はそうした不正を願ひ下げにしないではいけないよね。たとえば、+や-という一般的な数学の記号、さらには数学的な定式（私はこれを応用していますが）ならびにこうした定式のポテンツによつて諸概念を表示することをもつとも普及させた用法は、エ・ッ・シ・ェ・ン・マ・イ・ヤ・ーが一七九七年に出版した『自然形而上学の諸命題』や、一年後に刊行した『磁氣的現象をア・プリオリに導出する試みで行なつていたものなんだよ。——一七九九年に出版された私の『自然哲学への緒論』においては、力学的な所産や有機的な所産を私が演繹する際に最も際立っている点は次の箇所です。

「無機的自然は第一のポテンツの所産、有機的自然は第二のポテンツの所産であることが上で確定された。しかし、すぐに、それがもつと高次のポテンツの所産であることが示されるであろう」(*)。上述の書の七六頁。【128】

(*) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.II, S. 322

「生の過程はまたしても、化学的過程のより高次のポテンツでなくてはならない(*)。——有機的な所産に関しての自然の矛盾は、所産が生産的だとされる、つまり第三のポテンツの所産だとされるのに、第三ポテンツの所産としては、無差別に移行するとされるところにある」(**)。七七、七八頁。

(*) F.W.J.Schelling : Werke, Bd.II, S. 323

(**) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. II, S. 324

「個体は遅かれ早かれ、生産的であることを止めるが、それとともに第三ポテンツの所産であることを止める。すると、自然は、個体が第二ポテンツの所産（純然たる化学的なポテンツの所産）へ下ってきた後で初めて、個体とともに無差別点に達する」(*)。七九頁。

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. II, S. 324

「有機的過程が無機的過程のより高次のポテンツに他ならないにもかかわらず、有機的過程と無機的過程とが対立している前提するのが課題である」(*)。八一頁など。

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. II, S. 325

周知の『第一論理学綱要』においても、まったく似た形でポテンツ論がありますが、ただ、『自然哲学の構想』(二〇〇頁) (*) で、死せるマテリアについては、冬眠生活、動物の生活として、モナドの夢状態としてかたられて、理性生活については、(ライプニッツに従って) 覚醒状態として語られていることから、取ってきているんです。だってそこでは、人間にだけ第三のポテンツがふさわしいにもかかわらず、とりわけ、馬の表象を繊細に観察することから、彼にとつては、人間がこのポテンツにおいていわば頂上を極めているということが、明らかになるからね。もし、有機的自然が第二のポテンツの所産だと呼ばれている上述の箇所の最初のところに、師匠はすぐにこだわったんだ、ということを想定したくないからね。——そうして、これらのポテンツについて、彼はおごそかに宣言するわけです。「同一律の認識、したがって思惟の認識、哲学が、世界のうちに存続する限り、これらの定式は存続するであろう」(**) ってね。

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. II, S. 182 『自然哲学の体系の最初の構想』

(**) C.G.Bardili : Grundriss der ersten Logik. S. 285f. 「これらの存在者の諸段階の形式は、ピユタゴラスによって（おそらく東洋に由来している）数の下で考案され、ライプニッツの気高い精神によって再び励起されたが、彼とともに空中現象的には消滅していく同一律の認識が、思惟の認識が、したがって哲学が、人間のもとに存続する限り、存続するであろう。こうしたことを私は知っている。そして塵へと崩れ落ちる、こうしたことについて、たとえ人間が私の灰と私の父の灰とをもう一度混ぜ合わせても、人々には、かつて私は生きていた、と言って欲しいものだ」。

友人：もし、まったく白日の下に明らかになっているものについて、あなたが蓋然的に語っているということを解釈しようと思いません、変だと思ふようだったら、こんな人間のパトスなんか、悪く思わなきゃならないよね。非本質にポテンツでもって関わりとうとする彼のご立派な所産（原注）の終わりごろになって、彼によって用いられるためには、全く丁度いいタイミングで、あなたの『自然哲学の体系の構想のための緒論』が出版されたってことだね。そしてまさしくそのあたりで、自然哲学への悪態が始まっているわけさ。だけど、植物の本質や動物の本質などなどについて彼が語っているところでは、彼はあなたの自然哲学を明らかに真似しようとしているんだ。あなたにはもう一度、既に言及された箇所を思い出してもらわなきゃ。つまり、【163】あなたの『世界霊について——一般的な有機体を説明するためのより高次の自然学の仮定』の序文の序文（八頁）（*）で樹てられた命題、「機構は前提された有機体なくしては考えられ得ない」を、彼は自分のものにして、すぐにあなたに対して悪態をつき始めたその箇所を、そして、それとともに、「自我に宿る代わりに、将来有望な、展覧中の世界霊の紋章」について、まさしく今、語ることを思いついたのはどうしてなのか、疑いのような箇所を、思い出してみて。【163】

(*) F.W.J.Schelling : Werke. Bd. I. S. 417

(原注) あの著作でこれらの概念を応用するその素朴さが、それ以上、説明される必要のないことは、数学の第一の概念に対する粗野な違反がその著作の定式に見られるが、他の人によって既に注目されているのと同様である。——私の体系にポテンツに関しては次のような事情にある。すなわち、ポテンツは個別者においても全体においてもあつて、たとえば私は、どんな個体を構成するためにも、全体を構成するために、三つのポテンツが必要である。つまり、第一のポテンツにおいては、すべてのポテンツが(全体との絡みで)第一のポテンツに従属し、第二のポテンツにおいては、第二のポテンツにすべてのポテンツが従属し、第三のポテンツにおいては、すべてのポテンツが第三のポテンツに従属する。個別者においても全体においても、すべてのものにおいて唯一實在的なものは、私にとつては、Aの三乗、すなわち普遍的なものと特殊なもの、無限なものとは有限なもの、とが絶対的に一であつて、一言で言えば、えいえんなるものになつているところのもの、なのである。【163】

著者：彼はそれ以上のこと、やっているよ。機構は有機体によつて初めて可能にされるといふ命題に私がこだわっているって、彼は断言しているよね。これは彼の言葉なんだよ。すでに長いあいだ、彼はそのように言い切っているものだから、私は、結局、そうしたことについて書き留めた多くのものを、最も偉大なドイツの自然研究者の人に見てもらふために、送つたほどなんだよ。

友人：そうだったの？ いったいどうして、彼はここでこのことを語ることが必要だと思つたのでしょうか？

著者：ラインホルトを励まして、この自然研究者の名前を見つけさせたら、少なからず、楽しむことができたかも

ね。

友人：できたら、ラインホルトも、似たような場合での有名なダンベルガー (Damberger) (*) と同じように、思慮深くなればいいのですが。そのダンベルガーとの別の比較する点を彼は示しているんだけど、つまり死んだ人たちのなかに彼を移すというわけさ。

彼自身の理念の空虚さと貧しさはひどいもので、『寄稿』第二分冊において印刷されている論稿では、「有機体は原因と結果との流れが止められたものであって、すなわち循環行程 (Kreislinie) において自己自身へ還帰する継起である」(**) という命題も、合理的実在論へと受容されて、立派な分捕り品と見なされているんだから。こうした点で引き続き、ラインホルトから新たな類似性を見つけることができるでしょう。

(*) この人物については伝えられていない。Georg Erhard Hamberger (1697-1755) の誤植か？ (Vgl. GW IV, S. 585 Anm.)

(**) C.L.Reinhold : Beyträge, H. 2, S. 202 第五論文「合理的実在論もしくは哲学的分析の諸要素」——これに関するシェリングの典拠は、『世界霊について』ならびに『超越論的観念論の体系』を参照。

著者：あなたは、超越論的観念論についての批評から、そうしたことをご存知なんですね。私がむしろ、実在的な真理の多くを見出したのに、正しき根拠が欠けている(*) (ことは否定し難く、まずもって、へ思惟としての思惟) が実在的な真理として樹てられなければならないという、あれだよな。

(*) C.L.Reinhold : Rezension von Schellings System, Sp. 375 「シェリング哲学が、いろいろな即・自・的・に・そ・も・そ・も・真・なる・もの・を、天才的な素養によって、そしてシェリング的にしてフィヒテ的な頭脳の普通で

ない彫琢によつて見出ししているのは——その誤つた原理にもかかわらずなされていただけでなく、(純然たる実在的な真理として)むしろ、誤つた中間項を代えることによつて、誤つた原理を介してなのである」。

友人：さて、誰かが、内心の不安がどのように言葉に表れているかを見ようとするなら、その人には、ラインホルトの論文(『寄稿』第三分冊第三章「合理的実在論の諸境地の新たな叙述」)を薦めましょう。絶望のさなかにあるって忘れないものって何だろうね。ラインホルトには、あなたの観念論の構成全体がポテンツの等級順位によつて進行するということか、あなたが最近の「我が哲学体系の叙述」において応用している方法が、より限定された範囲においてはではあるけれど、既に『超越論的観念論の体系』の根柢となつている方法だということか、こうしたことは思いつきさえしなかつたんだろうね。

ラインホルトが『寄稿』第一分冊への序文において説明していたんだけど、彼は今回もまた思い違いをしているのなら(ということとは、今回は思い違いでないって、十分に分かつているんだろうね)、彼の名前なんか消えてもいい(＊)、つづこうんだ。[164]

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. I, S. VI. 「だけど、私は四度も思い違いをしているのではないか? 私がこの『寄稿』で告知し、記述しているこの真実にして本来的な終結、そして私が新たな世紀に対して祝辞を述べているこの真実にして本来的な終結も、それにもかかわらず、いわばまたしても、新たな歪んだ方向への始まりであるに過ぎないのではないか?」。

Ebenda. S.XVI. (バルデイリの『第一論理学綱要』を弁護する文脈で)「私が弁護しなければならぬ問題が、それ自身のために語らないのなら、私は弱虫であつて、足りないに違いないということを確かに知

つてい。だから、問題は語るように。そしてその問題が空虚な言葉しか持ち出さないのなら、学兄とともにも私の名前も消えてゆくでしょうし、それから私には、それ以上、何も名前に関しては、あり得ないし、許されないことになる」。

著者：彼は、自らの名前が消えることの許可をださなくても、自分からそうしたことをしちゃうよね。

友人：ラインホルトは一言で言う、死んでるよ、自分を終わったと思ってるんだろかね。

著者：あなたは、ラインホルトがその教義体系の新たな叙述を持つて行なった最近の試みの初めからすぐに、言及しなかったのですね？

友人：これは、あなた自身が読まなきゃ。

著者：分かっているでしょう、私がどんな風に思っているか。そして私が彼の哲学的な論説について期待するのは、大抵、ただか魔方陣について期待するのと同じくらいだつても。かつてあなたが我慢してそれを読んだのだつたら、あなたは、それについて私に伝える面倒をも引き受けたつてもんだよ。

友人：僕の知っている限りは喜んで。だから、言われているように、そして序文における彼自身の報告から窺えるように、とりわけ、『エアランゲン文芸新聞』の批評(*)は、彼を当惑させたんだよ。ちようど、蟻の勤勉な国民が、たとえば、通りすがりの腕白坊主にその建物を壊された時に、大急ぎでできるだけ上手に建物を再建するのと同じように、最初の動きが過ぎ去ったあとで、あの男も、自分の体系の粉々に砕け散つた学説の部分をもう一度拾い集めて、改めて解説して変様させることを始めて、そして既に半ばまで仕上げられていた合理的実在論の要素の叙述を、現在の新たな叙述へと改作したつてわけさ。これが出版されているのは(彼がこうしたことにまったく

無頓着なものだから)、スピノザが彼の師匠のデカルトから、シェリングが彼の絶対的同一性の体系のためにスピノザから、そして今再び、ラインホルトがシェリングから借りてきた、そうした方法的な言い包めの形式において何です(**)。なぜなら、彼は結果を感じ取った後で、問題を形式において求めるのは自然の成り行きだからです。問題は彼にとっては、苦渋を舐めることになっただろうということ、そして彼が何らかのものをもたらすためには真面目に悩んでいたということ、こうしたことは神は知っています。しかし、内面的な明証性に関しては、非常に多くの説明、解説が、いやそれどころか、説明の説明、解説の解説が、二〇字のところを平均して一〇・五字に、字間を開けて印刷されている(証明に鋭さにかけているものが強調によって補われていること)です。ことは、なるほど見受けられます。そしてこうした文章になっているわけです。自己自身を本質として本質において、そして本質によって、現実性そのものに即して繰り返されている本質、したがって、現実性に即した本質として、「思惟としての思惟」の性格を受容している本質としての本質は、理性的な本質である(***)。——しかし、それだけいっそう、学説はもちろん、いわんや論証も、上述の書物から読んだり聞いたりして取ってきたような、素材の無化の必然性についての、哲学的な論証でもありませんし、解説でさえないので、理性的な本質を考えさせることなどできないものなんです。【165】

(*) C.L.Reinhold: Beyträge. H. 3. S. Vff. 「ところで、私の現在の試みのために、私にとって生じ得たことは、カントやフィヒテの学派の超越論的観念論者たちにとって、また確かに私自身にとっても思いがけなかった『思弁的自然学雑誌』第二巻第二分冊における絶対的同一性の体系の出版以上に望ましいものはなかった。全哲学の新たな基礎学のうちでも、この最新のものを、これをシェリング氏は、自ら序文で言っているように、『今日までただ自分のためだけに所有していて、おそらくほんの少しの人と分かち持つ

ていた』のであって、またこれを『彼は、公刊しようと自ら望んでいた以前に、学問の現在の状況によって駆り立てられている、と見た』のであるが、これは、それに続いてすぐに出版された『エアランゲン文芸新聞』一二〇、一二一、一二二、一二三号での『寄稿』第一分冊についての批評において、全哲学の新たな基礎学のうちでも、この最新のものは、私に對置されていて、バル・デ・イリの合理的・實在論に對抗して、純粹・合理主義の名の下に有効なものにされているのである』。

(*) C.L.Reinhold : *Beiträge*. H. 3. S. Vi. 「シェリングとバル・デ・イリ、双方の学説体系の理解を促す双方の相互比較をできる限り易しくするために、私は第二分冊第五論文で既に半ばほど仕上げていた合理的實在論の要素の叙述を、現在の新たな叙述へと改作した。したがってそれは、スピノザがその師匠のデカルトから、といってもシェリングも（彼の絶対的な同一性の体系のために）スピノザから借りて来たような方法的な言いくるめの形式において、ここに出版されるのである」。

(**) C.L.Reinhold : *Beiträge*. H. 3. S. 154 「BにおけるマイナスBの三乗にbの三乗を加えると本質である。この本質は、自己自身を、本質として本質において、そして本質によって、現実性そのものに即して繰り返すものであり、したがって、現実性に即した本質として、へ思惟としての思惟の性格を受容している本質であって、理性的本質である」。

著者：他の人なら、その本性上、大衆的でないものを大衆的にしようと努力するでしょうけれど、この男は、彼自身、決してそれを越えることなどできなかった大衆性から大衆性を奪い、哲学的な定式でもってして哲学へと締め上げるために、いつも哲学を用いていたとさえ、私には思われるのです。

友人：ただ、次のような区別があるけどね。他の人たちなら、自分たちのしていることを知っているのですが、ラインホルトはまるで、深い夢の中にいて難しく疑わしい難儀に焦り、そして目覚めてからはまったくつまらないことだったと気付くような人に似ているんです。といっても、彼は、目覚めないまま、ある夢から直ちに別の夢へと落ちてゆくんだけどね。彼の最近の諸命題から、形の崩れた形式を大部分取り去りさえすれば、きつと、理性的な本質は思惟する本質であるなどという先の陳腐な決まり文句しか、そこからは見出せないでしょう。そこで僕は、次に、すぐれて彼が行なおうとしていた新たな歪曲と逃げ道とを、見つけてきたというわけさ。

著者：ラインホルトの逃げ道を立たなくちゃ。

友人：たとえ、ラインホルトが、序文で読者たちに、新たな「我が哲学体系の叙述」に関して重要なのはこれらの形式の応用だなんて、信じ込ませようとしているにしても、問題のあなたの「叙述」について、理解できることは良く学ぶ、という姿勢を怠ってはいません。ただ、彼はそれを非常に具合悪く理解したんだけどね。彼の絶対的同一性について先ず言うなら、限らない反復可能性は、今度こそは実際に、反復されなかったのです。

著者：私たちは一致して、こんなものを認めないよね。

友人：もちろん。あなたが火をつけた箇所は、彼が喜んでそこから密かに退こうとした箇所だ、ということに人はきつと気付くでしょう。

著者：だけど、彼にとって今、そうしたポイントであるのは、一体、何かしら。

友人：それは、〈思惟としての思惟〉の性格だという以上でも以下でもありません。そしてこの性格は絶対的同一性に他ならないわけです（*）。

(*) C.L.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 128 f. 「思惟としての思惟」は、絶対的同一性そのものであり、

あるいは同じことではあるが、一者における一にして同じものによる一者としての一にしておなじものである」。

著者：「お気に召すまま」の愚か者と同じように、あるところのものは、そうしたものとしてあるがままにそれであるものなんだよ。【166】

友人：「だけども気を付けなきゃいけないのは、それは単に暫定的にしか妥当しないんだよ。（だって、ラインホルトの哲学的営為全体は、暫定的でしかないからね。）それはただ、がいぜんてきに、仮定的に樹てられているんであって、一つの前提、一つの緒論のような提示部でしかなく、それに他ならないわけさ（一九三頁）（*）。

（*）C.I.Reinhold : *Beyträge*, H. 3, S. 193f. 「あの『寄稿』第一分冊における、へ思惟としての思惟についての私の記述は、私がおつきりと、繰り返し断言してもいたように、もっぱら蓋然的に、そして仮定的に樹てられている。そしてそれは、他ならぬ、暫定的で緒論のような提示部として、今後ようやく取り掛かられるべき合理的実在論の叙述のために、そしてそこで初めて可能になる私の立場を確定するの役に立つはずである」。

なお、ここでの「友人」の語る論点は、ヘーゲルの『差異論文』で強調された論点である。

著者：素晴らしい。

友人：「だけどもさあ、ラインホルトや彼の師匠にとつては、何が必然的にかつ定言的に、絶対的同一性と理解されようと、それは、手探りの果てに漸く見つけることのできるものであって、それからやっと、思惟を適用するな

かで、果たして、またどの程度、主観性、客観性、あるいは双方が同時に包括されているのか、ということが明らかになるっていうんだ(*)。

(*) CL.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 198 f. 「果たして、またどの程度、へ思惟としての思惟への適用は、主観的であるのか、客観的であるのか、それとも同時に双方であるのか、ということは、あの適用の調査によって初めて構成されるべきものであり、それゆえに、そうした調査に先立って、調査する人にとって、は、単なる問題、すなわち何か徹底的に未決定のものでなければならぬのである」。なお、当該箇所は、『寄稿』第一分冊九五頁以下からの引用である。

著者：超、冴えてるね。絶対的同一性は半身不随の状態なのだから、完全に分裂してしまわないようになって気遣って、ラインホルトに対して、その絶対的同一性を急いで、定言的に設定してあげるなんて、しなくていいよね。だんだんと分かるだろうから、時間だけが彼らに与えられたらいいってもんだね。

友人：この逃げ道を通じて、彼らが僕らから逃げるようなことがあつたらいけないよ。——あなたはこの点について、もっと突っ込んで聞かなきゃ。第一二節では次のように断言されているんだ。客観性においては、可能性と現実性とは接合されている。したがって、現実性と可能性とは、他方を欠いたら一方もないだけでなく、それぞれが他方においてもある、ただし、それにもかかわらず、一方が他方であつたり、他方になり得ることはないままである、って(*)。

(*) CL.Reinhold : Beyträge. H. 3. S. 139f. 「客観そのものは、現実性と可能性とを一緒にしている、したがって、純然たる現実性でも純然たる可能性でもなく、同時に双方なのである。しかし、双方は同時に

離接 (B₁B₂) においてある。ここで可能性と現実性とは、相互から排斥されていつつ、かつ相互に結び合っている。いずれも、他方なしにはあり得ない。しかし、いずれも、単に他方でないだけではなく、他方において存立するのではない、ということではない。ところが、思惟におけるこのもの、すなわち、可能性によって規定された現実性、bそのものは、接続における $\neg B_1$ と B_2 なのである。——したがって、現実性と可能性とは、単に、他方なくしてはあり得ないだけでなく、それぞれ他方においてある。ただし、それにもかかわらず、一方が他方であったり、他方になったりすることはないのである」。

著者：やっぱりねえ。それはまるで、私たちが無差別と呼んでいたものの記述みたいだね。可能性と現実性とが客観において結合されていることができるので、一方が他方であったりしないにもかかわらず、一方が他方において包括されていることができ、より高次のものに合一されていることのないまま、つまり絶対的同一性によって合一されることのないままだなんて、いったいどうしてそうなるの。絶対的同一性についても、可能性と現実性とが反省された認識において、前者が無限な思惟に、後者が無限な存在に対応しているので、必ずや、思惟と存在との、観念性と実在性との、絶対的な無差別でなきやいけないのにさ。

友人：このことがもつとはつきりと分かるのは、一五節の補遺一だよ。そこではこう言われているんだ。「本質、必然性、絶対的存在としての絶対的存在は、可能性の存在だけでもなく、現実性の存在だけでもなく、(いずれも他方なしでは存在しない限りで) 可能性の存在にして現実性の存在でもない。むしろ、可能性の存在そのものは、現実性の存在そのものうちに包括されていて、同時に現実性の存在そのものも、可能性の存在そのものうちに包括されている。したがって、可能性の存在が現実性の存在に、そして現実性の存在が可能性の存在に、なっ

てしまっていたり、なることができたり、するものではない」(*)。——こうした絶対的存在が主観的なものと客観的なものとの絶対的同一性を目指しているのは明らかです。ですから、この命題は、ラインホルトの体系の第一原理に矛盾するわけで、必要だと見なされた譲歩と云ったところででしょうか、他でもない【167】彼の第一の根拠にして基盤の上で成長したものと見なされていいでしょう。だけど、この手の最も見事な緊急救難を彼は、他の箇所、二六節の補遺三でも隠していたんだ。そこではこうなっているんだけど（聞いてみて、驚くから）。「絶対的同一性でさえも、その適用においてのみ、絶対的なものとして考えられ得るにすぎない」(**)。

(*) C.I.Reinhold : Beyträge. H. 3, S. 141f

(**) C.I.Reinhold : Beyträge. H. 3, S. 160

著者：僕はそうなるって言わなかったっけ？ 絶対的同一性は適用されてのみ、絶対的なものとして考えられることができるんであって、適用されてこそ思惟が素材と合一されているので、絶対的同一性は、思惟と素材との統一である限りでのみ、絶対的なものとして考えられ得るわけです。だからこそ、ここで私たちは、統一と対立とがそれ自身、またしても一になっているような統一を持つわけです。

友人：だけど、それによってラインホルトは、極めてひどい矛盾へと巻き込まれたわけだ。だって、四節では、こう言われているんですよ。絶対的で無制約の同一性として、〈思惟としての思惟〉は、端的に自分の外に何も前提しないって。

著者：落ち着いて！ これだって同じことだよ。だって、〈思惟としての思惟〉は、そうやって、素材をも自分の外に前提しないまま、ですから自らの内に持っているんだもの。

友人：いや、そうじゃないんだ。なぜなら、五節によると、〈思惟としての思惟〉は、素材を、ただ自らのうちに前提するだけじゃなくて、適用としての適用のためにも、もちろん前提しているからね。だから、〈思惟としての思惟〉は、適用なれないからこそ、適用されない限りでのみ、素材を前提するっていうんじゃないよ。だけど、〈思惟としての思惟〉が適用されるに到るや否や、素材については処置なしだね（*）。

（*）Cl.Reinhold : Beyträge, H. 3, S. 129 「五節 説明 〈思惟としての思惟〉は、その適用としての適用のために、即時的には無規定的であつて、適用における思惟によつてのみ、規定可能なものを、適用において前提する。こうした前提されるものは、マテリーもしくはシュトゥッフと呼ばれ、Cによつて表示されるはずである」。

著者：だから、それつて、純粹な胃としての純粹な胃は、端的に自分自身の外に何も前提しないといわれるようなものです。だけど、その適用としての適用のために、純粹な胃は、必ずや、素材を前提しています。

友人：もちろん、そうだよ。だけどさして、他の箇所では、絶対的同一性は適用においてのみ絶対的だと、主張されてきました。だから、四節で、絶対的である限り、自分自身の外には何も前提しないものは、二六節では、自らの外に何もかを前提する限り、絶対的になっちゃうんだね、これが。

著者：最上級にひどい矛盾だと思ふよ。

友人：能力がなかったにせよ、善き意志はあつただろうに、といつても、大急ぎで何かまつたく違うものへとすり替へる意志だけどね。こうした新たな破片を持つてくるために、まさしく「既に半ばほど仕上げていた叙述」は、現在の新たな叙述へと改作されなければならなかつたわけですよ。【168】

友人：まったくそうだよ。運命を変えるとは言うけれど、ラインホルトは哲学を変えてるんだ。

著者：彼に悪いことをしちゃいけないよ。むしろ逆にこう言ったらどうかねえ。つまり、彼は悟性については弱いものだから、自分の問題について自信がないまま不器用に対処するので、善き意志という点では、自分の持っている世界からはいかさ法師だとも見なされることもあるつてね。彼はすでに、別の機会だけれど、まさにボロを出していたんだよ。たとえば、素材は物自体の表象に属するという注目すべき定理は、ラインホルトが、ライプチヒの批評家に対してこともあろうにその定理を弁護しようとした時に、すばやく、純然たる哲学的な付論を補わなきゃいけなかったんだ（『哲学者達の従来の誤解を正すための寄与』第一卷四三六頁参照）（*）。当時ラインホルトは、付論的な哲学的営為でもってその定理をもっていたんだけど、今は、大雑把以前の哲学的営為でもってなんとかしようとしているつてわけさ。これが単に無意識のままの救いようのない逃げ口上であった、ということ。当時、誰が考えただろうか？ だけど、ラインホルトのことを心から単純に信用して、ラインホルトが一連の定理においては、先行するものからの証明と、次に来るものための必然的な帰結でもって樹てた命題、そして彼の体系にとつては尚のことまったくは不可欠であった命題を、自分自身で単なる付論だと見なすことができた人つて、どんな人間だろう。だからさ、こんなことはもう何回も起きてきたんだよ。

（*）ラインホルト『哲学者たちの従来の誤解を正すための寄与』第一卷、第六論文「表象能力の新たな理論の試みについての説明」。その四二四頁以下で、「ライプチヒのハイデンライヒ教授によるへ」ライプチヒ学者新聞』四六号での表象能力の理論についての判断が再録されていて、四三〇頁以下で、「上述の公告に含まれている異議の説明」（『一般文芸新聞』八〇号知識欄、一七九〇年）が、そして最後に四三四頁以下でもう一度、「ハイデンライヒ教授の答弁」（『一般文芸新聞』八八号知識欄、一七九〇年）が

再録されている。四三二頁以下で、ラインホルトは次のように言っている。「外的な諸事物の現存在の導出は、付論としてしかそこにはない」。ハイデンライヒはこの文章を彼の「答弁」の四三六頁において引用している。(Vgl. GW.IV, 586 Anm.)

友人：今回の場合、彼は自分の遺言を残してもいたんだよ。だって、フィヒテに対抗する論文においてラインホルトは、こう言明しているからね。「つまり、自分に利己愛があつたなら、一方もしくは他方だけが受け容れられ得るような場合に、甚だしく馬鹿で平俗で通俗的な対処よりも、むしろ、意地の悪い陰險な対処を責めるだろうと、弁えている(二〇四頁) (*) ってね。彼にとつては望ましいのかどうか、ここに四節での補遺の証明がある。「絶対的同一性は、その適用においても自己同等的に留まっている。したがつて、へ思惟としての思惟——純粹思惟の適用においても、そうである」(*)。さて、この命題は、「絶対的同一性は、決してアウフヘーベンされ得ない」つて言う命題と瓜二つのように見えませんか？すると、この命題は、思惟と、思惟を二つに分ける素材との双方が一つになっている上述の接合と、どのように連接するのでしょうか？(上述の箇所六〇、六一頁) (**)

(*) C.J.Reinhold: Beiträge.H. 3, S. 129 「それ(純粹思惟)は、徹底的に絶対的同一性に他ならない。しかし、これは、そのものとして、その適用においても、自己自身に同等のまま、したがつてへ思惟としての思惟——純粹思惟の適用においても、そうなのである。そして絶対的なものとして、思惟の適用において、仮定なしの定立、絶対的な定立である」。

(**) 頁付けは、『哲学批判雑誌』を指しているので、訳出にあつた際の底本の二五八頁を参照。

著者：確かに、ラインホルトはいつも、時とともにますます勉強して、そしてさらに熱心に自分の体系を削り取ったり飾り立てたりするものだから、その体系をまったく透き通るくらいにまで削り取りさえしないなら、時間をかけて、自らの体系が意欲しているものであれ、もつともつと削り取ることだつてできますし、どんな場合でも、その著者がかつて考えていなかったし、今も考えていないものなら、削り取つたつて構わないのです。

友人：その師匠に関してだつて、復習の女神フリーエが彼を見捨てたとなつては、もちろん、彼はもう跳ね上がることはないでしょう。今や彼は、「哲学は近頃、どうしてそれほどまでに墮落してしまつたのか」(*)ということ、自分自身の人格に即して、極めてはつきりと経験する、最良の機会を持つているわけですし、哲学において自分の自我を示すというよりも、自分の自我に即して哲学を示すために、ありとあらゆる動機を持つているわけです。

【169】

(*) Cl.Reinhold : Beyträge, H. 3, 第二論文

著者：素材という、さまざまに遍歴して、散々惑わされたものを忘れないでね。

友人：素材は、根元哲学においては、証明を伴つた教義として樹てられて、次に困つた時には単なる付論として放浪しなくてはならなかつたわけで、引き続きそれが呼び戻されてからは、第一分冊(一一一頁)や第二分冊で要請されたわけです。その後、今やここでは、説明の名の下に紛れ込まなければならぬって訳です(*)。

(*) Kl.Reinhold : Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsmögens。『第二三節

表象の内的条件、本質的な構成要素としての表象作用に属しているのは、(a) 表象の素材、すなわち受容性にあたえられるものであつて、その形式は多様性である。(b) 表象の形式、すなわち自発性に

よって作られたもので、その形式は統一である」。

Cl.Reinhold : Beyträge. H. I. S. 110 「しかし、この内的な性格の論究にあたって、我々は適用としての適用を無視して、単なるへ思惟としての思惟へに着目したのであるが、この内的な性格が思惟自身の適用ではけつしてなく、またそうであり得ないというのが確實であるなら、思想の適用において、適用によって、あの性格に、すなわち、AにおけるAに因るAとしてのAに、別のものが付け加わらなければならぬのも確實である。この別のものを我々は、IIによって表示して、それが何であれ、思惟の適用のマテリーと名づけたい」。

著者：確かにね。あの時代以来、証明ということではもはや続けなかつたのですね。

友人：それでも、その素材は既に薄くなつてしまつたので、やがてそれでもつて飾ろうとしても透明になつてしまふうんじやないかな。つまり素材は、今やそもそも、無規定的なものであつて、自己自身によつて規定され得ないものつて言われているんだから。

著者：すると、無限な多様性は、素材から締め出されているんだね。こうした無限の多様性を私たちは捨て去らなくともいいのね。

友人：公衆は、そんな粗野な欺瞞に気付かないままで、着古された素材をあいも変わらず、初めて染色されたものと騙されるだろう、なんて考えるほどの馬鹿さ加減には感心するよね。

著者：それに、まさにさつきあつた（上述の六一頁↓原典一五八頁）根絶できない形式は、いったいどこにいったんだらうね。根絶できない形式を持つていたものならさあ、そもそも徹底的に裸で純然たる無規定的なものになつ

てしまうほど、落ちぶれることなんて決してなかっただろうと思うんだけどね。

友人：教義体系全体と同じように、そうしたことについても、少なからずがっかりさせられるよね。序文でさ、体系の空虚さが余りに目立つもんだからさ、体系がとりわけ素晴らしいなんて釈明されるように、素材という色褪せたものも、その独自の説明を獲得するんだよ。だって、あの説明の説明ではこう言われているんだよ。つまり、樹てられた説明が、究明する人自身に、したがつてへ究明された、そしてその限りでのみ定言的で必然的な認識に先行する限り、説明は、他ならぬ仮定的で蓋然的な妥当性を自負するんだそうさ。——さて、フィヒテと一緒に語らるなら、人はラインホルトに何かをするだろうね（*）。

（*）「さて、誰か彼に何かするだろう！」は、『哲学雑誌』第五卷第三分冊に発表された、フィヒテの「哲学的な調子の年報」に見られる。（Vgl. GW IV.S. 587 Anm.）

著者：あゝあ、素晴らしいダナイーデの寓話、どれだけ、どのくらい多くの事例において、あなたは最高の真理として確証されるんだろうね。罰のせいではなく、（彼女たちの罰である）根拠を前にした純然たる生まれつきの不安に駆られて、【170】ラインホルトやバルデイリの連中は、彼女たちが無理やりやらされたのとは違って、自由意志に基づいて、穴の開いた樽に注ぎ込んだでは、下へ漏れ出るままにしているんだよ。

友人：だけどさ、仮に一度だけでも、幾何学が蓋然的で仮定的な説明から始めて、必然的で定言的な真理に到ることができたとしたら。

著者：一言で言うとな、我が友よ。彼自身が説明していたことではあるんだけど、反対陣営に味方して語ったように見えても、矛盾している場合には、あらゆる概念について馬鹿で単細胞だと見なされるというよりもむしろ、

陰險で悪意があると見なされてしまうよね。そうであるからこそ、私たちは、すべてのことをよく考えた上で、いかに彼の利己愛を勘定にいれる限りは、今度こそ、彼の説明を利用することができないわけです。どうしても、愚かさの典型にして見本として彼を示さなくてはなりません。そこでこうなったからには、今度こそ、著作をものすることへと進んで、彼をその本性的な性質において呈示しようと堅く決意した、ってことかな。

友人：そのために必要なのは、それについてそのために、ああだこうだと多弁を弄することなく、私たちの対話の展開のように、いろんな事実をまったく単純に展開することに他ならないでしょうね。この対話を出版することをためらう何かがあるっていうの？

著者：友よ、何をしているか、何を私にさせようとしているか、分かっている？ 私たちはラインホルトを手伝って、彼ができればよとできまいと、論証的方法のようなものを真似させて、それを通して改めて彼に、自分の精神の空疎さと自分の哲学の空疎さとを表明させる機会を与えて、彼に対抗する私たちの着想を彼自らの手で掘り起こさせ、それをニコライがやったように、もう一度字句どおりに掲載させて、彼の雑誌をそれで埋めてやる、なんてことを目指そうっていうの？ だって、ラインホルトは、それを引用することで、私たちに十分な打撃を与えたって考えているんだよ。何かの主観と客観との同一性に、もしくは観念論と唯物論との均衡に還帰するということ、これがあたかもそれ自体で驚くべきことであつたかのように示した時、既に引用された根拠に基づいているにもかかわらず、一切のことをしてしまったように思っているのに。彼は、そうしたことについては、他でもない、果てしなく繰り返される内容のない無駄話でしか、自分を分かってもらうことができななんです。彼は、自己自身によって、自己自身の必然的で定言的な認識に到達するまで、暫定的に、そして蓋然的に、自分の（真理への愛）、（真理への信仰）というマントにくるまって、くつろぐことになるんだね。それとも、彼が、正式な嘘・偽りや中傷に

まで進むほどに、彼の子羊のような性質を克服することを目指すべきでしょうか。そうなるのであれば、私たちが自ら罪を犯すというわけではありませんが、罪の原因となりましょうから、申し訳ないことだよ。

彼は、すべての困難な点からあつざりと逃げてるんだよね。つまり、難点としてあるのは、二元論、思惟を触発する動物的衝動の相互並存、素材、新たな叙述の挿入と書き込み、それに私たちの証明です。その証明では、【171】ラインホルトは、一二月前に自分が書いたものを一年後にはもはや知っていなくて、自らの着古した哲学を新たな発見だと、そして自分の哲学を羽織って厚化粧された浮浪児を偉大な哲学者だと見なすまでになっちゃった、ということが明かされたわけです。一言で言うとは……

友人：まったくフィヒテの返書に対する彼の説明みたいだね。

著者：あ、あなたはそれについて、まだ私に話しをしていないよね。そこではいったいどのように、彼は自分のことを考えているの？

友人：ラインホルトは、フィヒテが彼に浴びせた辛辣な嘲笑を、思いやりや優しさ、そしてかつての好意の名残だと、一生懸命に主張したり、あなたが一切のしがらみを捨ててラインホルトに全面的に立ち向かったのに対して、フィヒテは、今もお、ラインホルトに対するいくばくかの尊敬を抱いているんだなんて、一般大衆に信じさせようとしているんだよ。とりわけ、ラインホルトは、フィヒテが彼を、私の尊敬に値する友人なんて呼んでいることを讃えているんだけど、自分の助手に話しかけるような調子なのね。次にラインホルトは、かつてフィヒテが彼に対して示していた丁寧な証言と善き社交性を生み出しているよ。

著者：神のみぞ知る、つてとこさ。フィヒテがつまらない大鼓持ちのことで苦勞して、一度ならず何度も宣言しようとしていたなんてね。

よくまあ、ああいう輩は希望を捨てずにいられるものだ。

あいも変わらずくだらぬことにしがみつки

手を鍬代わりにして宝をかつぽじくろうとし、

そのあげく、みみずを見つけて喜んでるのだ（*）

ラインホルトは、おそらく、フィヒテが彼に対して言ったことを、自由で素晴らしい精神に対して最高度にそむくものに違いなかった彼の抑圧された生徒根性を何がしかのものに高めようとして、間違つて浸かつちやつたんだらうね。先の証言で一体どうしようというんだらうね。

（*） Vgl. Goethe : Faust. Der Tragödie erster Teil. Nacht Vers 602-605u. Vgl. auch Vers. 521

訳文は手塚富雄訳。

友人：ラインホルトは知識学について何も理解していなかったと言われた時に身まとう素振りでしかない証明だよ。

著者：今や十分に白日の下に晒されたと思うんだけど、そうしたことについて他でもない、フィヒテが間違つていた、と明かす証言さえあるんだよ。ラインホルトがフィヒテを理解していたとフィヒテはいつも信じてはいたが、そうだと知ることは決してなかったと、フィヒテが彼の『ラインホルト宛返書』でも言っているようにね。私は、フィヒテの著作に対するラインホルトの批評も、それ以外の、フィヒテについて自分で発表したものも、【172】知識学についての最初の声明しか読んでなかったんだよ。これとて、一回きりで飽きてしまったけれどね。だからどの程度、フィヒテがラインホルトによって理解されていると信じていることができたのか、私には言えないよね。彼の

最初の声明についての私の意見は、『哲学雑誌』（二七九一年版、第一〇号）（*）にあるけど、ラインホルトが知識学を決して把握していなかった、ということ踏まえたものだよ。

（*）ラインホルトは『一般文芸新聞』一七九八年一月四、五、六、七、八日に発表した「知識学の批評」と「最近の哲学の背理について」を指示している。シェリングは、「形而上学と超越論哲学一般の現在の状況について」だと理解している。シェリングの意見は、「最近の哲学的文献の一般的概観」に見られ
2 (Vgl. Schellings Werke, Bd. I, S. 333 f.)

友人：それでも彼は、懲りてないよ。だって、どんなに貧弱な意志自由の概念を彼が樹てたことか、意志自由を単なる恣意においてあるとするような救いようのない理論を彼が樹てたことか、今は誰が見ても分かることだけど、最後の変節に到るまで改めなかったことは、周知のことでもあるよね。あなたは、どのような悪い道を彼がすすんでいるか、ということ、その論説やそれよりもっと前にも（*）既に彼に対して示していたよね。今、彼はそうした神をも恐れぬ表象について——いわば当然のことなだけけれど、彼の名前においてではなく、フィヒテやあなたの名前でもってさ、『ドイツ・メルクル誌』や彼のジャーナルに公表された彼の報告を捨てているんだよ。実際には同でも良いわけがない無神論という告発を、こうしたことによって根拠付けたのであって、結局のところ、彼はあなたに対抗する論説の終わりごろで、「ここで無神論をかぎつけることが許されないだろうか——あなたは無神論を考慮しないのだろうか」なんて問うまてになっちゃってわけさ。

（*）「もつと前」というのは、「哲学の原理としての〈自我〉について」を意味している。

著者：ラインホルトは、自分の予見能力や嗅覚能力に欺かれることについて、多くの機会に多くの経験を積んできたのに、彼を利口にするには不十分だったようですね。それでも、それらの経験が、他の多くの人たちに示してきたのは、その人たちがどう考えられなくちゃならないか、ということでした。だけど、こうした誹謗の無礼は、彼自身に跳ね返っていくもんだよね。耳を傾けることができても、彼の名前は落ちぶれてしまって、彼の訴えを注意するような人はいなくなつたのです。私は、貴重な時間を棒に振つて良いものでしょうか。私は、ひとえに私を惹きつけていて、唯一没頭させるものから視線を逸らすべきだ、と仰るのでしょうか？ 彼らは私を、誹謗したり中傷したり、時々かき乱したりすることさえあるかもしれませんが、ですが、彼らがののしっている問題は、悪い同時代人のねたみよりも生き延びる（überleben）でしょうし、数から言えば少数ですが、重要性や洞察力から言えば断然大きな部分によつて、問題は今や、そうであるものだと認識されているのです。

友人：ですから、僕はこの対話を早速にでも書きとめることを、もう一度お勧めしますよ。たいした手間ではないからさ。

著者：私は、まだ自分の問いを終わっていないんだよ。私たちは、私たちの間で、どうやって話しを進めていくか、話し合つてきたよね。つまり、私たちは、犬を犬だと、猫を猫だと呼んできたわけです。私たちはもう一度、復唱しましょうか。私たちはラインホルトを、頭の弱いやつだと、愚か者の見本だと呼んだつて。そして彼について判断するに、彼はすっかり落ちぶれて、一晩中、馬鹿について、その師匠について思いをめぐらせているものの、彼は馬鹿であるからして、その馬鹿さ加減においても、平凡で平俗で下衆だ、つて。

友人：ちょ、ちょつと、間違つた人間性に向かつてゆくことにすっかり消耗してしまつたんだね。連中に、落ち着いて自分たちの注釈をつけさせようよ。彼らは、間違つた一撃を絶えず試みては、卑劣さに添加する危険性があら

ゆる瞬間に立ち現われている中、【173】なら思慮のない程度の判断というよりもむしろ、中庸を装っている律儀に合わせることができるところから。あなたが彼らに立ち向かつてはだめなんです。

著者：私たちは、私たちの対象となった人の哲学的な才能と、かつては有名であったその名前を非難したいのだからか。

友人：いやいや、実際のところ、本当に、僕らには、今もかつても、そんな気はぜんぜんなかったよね。

著者：私も、人で行なった私的対話を公表することを既に十分やってきましたが、それを公衆の前に持ち出したら、世間は私たちを不人情だと見なすだろうけど、それも引き受けましょうか。だって、師匠とのシーンが、私たちの今の情報にとっては必要だからね。

友人：考えてみて。あの男が、哲学の没落していく様子についての論説（*）で宣言していたよね。あの男はその脈絡で遠慮がちに自らをソクラテスと等しく並べていたわけだけど、書くことを嫌悪している人間なら、その人を侮辱しないまま、その人の教えに公共性を与えることが許されている点でも比肩されるべきだ、ってわけですから。

（*）『寄稿』第三分冊第二論文のことを指す。

著者：だけどさあ、それを語ったことは師匠にしてみれば気持ちのいいものではないだろうし、彼に対抗してはっきりと示したわけではないんだけど、いったいいつ正式に、彼は拒否するだろうか。かといって私の望むところではないのですが。

友人：それを出版させることによって賭けているあなたの言葉や名誉が、彼に対して示すのは、彼が嘘つきだと思われる、ということだよ。

著者：あなたは私から一切の逡巡を取り払ってくださいました。そこで、おそらく専門的な対話を求めている友人たちなら、専門的ではなくて、まったく自然な対話を見出して、私を非難するんじゃないかという最後の逡巡を、私から取り払うことができますか？

友人：それもできるよ。だって、あなたをよからぬことに引きずり込んだ責任なら、僕にあるんだから。どうする？
著者：よし、分かった。いっそう喜ばしいはずの来るべき日々を期待して、お元気で。

《 解題 》

ここに訳出したF・W・J・シェリングの「絶対的な同一性―体系、ならびにそれと最近の（ラインホルト流の）二元論との関係について―著者とひとりの友人との間で交わされたある会話（Ueber das absolute Identitäts-System und sein Verhältnis zu dem neuesten (Reinholdischen) Dualismus）」は、一八〇二年一月に、シェリングがヘーゲルと共同で編集・発行を始めた『哲学批判雑誌』第一号第一分冊に発表された論考である。訳出に際しての底本は、G.W.F.Hegel: *Gesammelte Werke*, Bd. IV (Felix Meiner) を用いた。

この論考を一読すれば、シェリングが同一哲学の正統性をかけて、ラインホルト、そしてバルデイリに対して、反論を試みた重要な論稿であることが理解頂けると思う。そして単なる論駁書ではないところに、この論考の意義がある。これを明らかにするために当時の思想状況を説明することが必要である。

一八〇〇年の復活祭に出版されたばかりのシェリングの『超越論的観念論の体系』についてラインホルトは、これが「同一性」によって基礎付けられなければならないことを、バルデイリの同一論の立場に依拠しつつ、一八〇〇

年八月一三日付の『一般文芸新聞』で批評した。ラインホルトによる「シェリングの『超越論的観念論の体系』についての批評」の三六四頁は次のように言う。「シェリング氏の哲学的営為が狙うのは、客観的なものと主観的なものとの同一性を説明するという以上のことでも以下のことでもないが、こうした同一性は、まさに客観的なものと主観的なものとの同一性であるが故に絶対的なのであって、そして「絶対的なもの」としては、説明できるものでも、またその必要があるものでもないに違いない。なぜなら、同一性を説明する為には、既に同一性を廃棄しておかなければならないからである」。

三六五頁「説明するために廃棄された絶対的な統一もしくは一つの絶対性の代わりにシェリング氏が得るのは、二つの絶対的な相対性もしくは相対的な絶対性、つまり絶対的に主観的なもの、純粹自我——そして絶対的に客観的なもの、自然である。双方のそれぞれは、その相対性によるだけなら他方を排斥するが、その絶対性によると他方を自らの内に捉える。そしてそれ故、それぞれが学問において第一のものとして考察されるのに応じて、必然的に他方へ遡及するのである」。

当時のシェリングは、主観的なものから出発する超越論哲学と客観的なものから出発する自然哲学との二部門の同一性に、哲学の全体系を捉えていた。ラインホルトによる批評は、言わば構築途上にあつたシェリング哲学の二つの基礎学の存立が、廃棄してしまつた同一性を再び想定することに掛かっているという自己撞着を指摘している。こうしてラインホルトは、「シェリング氏は、彼の『超越論的観念論の体系』を通して、真理を構成する弁証法的な技術の傑作を呈示した」と評価しつつも、その超越論的観念論の課題が達成されるのは、「哲学に於ける観念論の完全な昇華」を以てである、と結論付けたのである。

この批評に接し、シェリングは、「救いようのない批評」(GA, III, 4, 291)だとフィヒテに宛てて訴える。それ

に於てフイヒテは、一八〇〇年一月三〇・三十一日の『エアランゲン文芸新聞』に、「バルデイリの『第一論理学綱要』についての批評」を発表する。フイヒテによれば、バルデイリの体系は、表象が表象作用や表象されたものをも意味する (Vgl. Gdel, 77f.) 点でラインホルトの根元哲学を想起せよ (Vgl. GA, I-6, 435, 439u. 442) 、それにバルデイリが問題とした、1としての純粹思惟が適用された思惟としての1が加えられて2になる、という「自己自身からの自我の超出」(GA, I-6, 439) というのは、純粹思惟が存在しない以上、不当なものであり、A || Aは単なる思惟の繰り返しではなく、意識において最初のAが指定されていることへの反省であり、自己意識を、つまり自我を存立せしめる行為を表現している (Vgl. GA, I-6, 447) とする。フイヒテはこの批評を、シェリングに対する間接的な弁護で閉じているが、間もなくシェリングの自然哲学が超越論哲学の枠組みを超えていることに想到することによって、フイヒテとシェリングの間にも訣別の時が来ることになる。フイヒテに代わってシェリングと共同戦線を張ることになったのが、ヘーゲルである。

一八〇一年初頭には、ラインホルトの『一九世紀初頭に於ける哲学の状況について一層容易に概観するための寄稿』(以下『寄稿』と略記) が発刊される。五月にはシェリングが「我が哲学体系の叙述」を発表し、同一哲学を樹てる。そして七月に、こうした思潮の新たな渦流に接しつつ、ヘーゲルは『差異論文』を仕上げたのである。

『差異論文』立論のきっかけとしてヘーゲルが挙げているのは、フイヒテとシェリングの哲学体系の差異について、全く予感しないだけでなく、両者の哲学的側面を看過してしまったラインホルトの混乱 (Vgl. GW, IV, 5) である。しかしヘーゲルは、「我が哲学体系の叙述」に基づくのではなく、『超越論的観念論の体系』に基づいて、「同一性の原理がシェリングの体系全体の絶対的原理である」(IV, 63) ということを論じている。つまりヘーゲルは、シェリングの同一哲学をフイヒテの知識学から高めるとともに、『超越論的観念論の体系』の内に同一哲学を読み

込み、「我が哲学体系の叙述」との一貫性を跡付けようとしたことになる。「従来、主観的な主観―客観の学は超越論哲学と呼ばれ、客観的な主観―客観の学は自然哲学と呼ばれていた」(GW. IV. 68)が、それらは内面的には同一である (Vgl. GW. IV. 67, 71u. 74) 以上、「同時に一つの連続性において連関する一つの学として見做されなければならぬ」(GW. IV. 74)。

しかし、ラインホルトは先の「シェリングの『超越論的観念論の体系』についての批評」で既に次のように、シェリングが同一哲学へ移行するプログラムを予想していたのである。「知の単なる主観的なものが端的に第一のものとして想定され、そしてそれによって絶対的な主観性にされるなら、それは超越論哲学の主題であり、原理である。それ故、これは必然的に観念論とならなければならない。同様に、自然哲学は实在論でしかあり得ず、一切の实在論は自然哲学に他ならない。しかし、实在論と観念論とは、〈自己〉自身を条件付けている一にして同一の無制約者〉の相違せる、といっても必然的に相互に参照し合う眺めに他ならないのである」。

シェリングの同一哲学への展開を予示していたラインホルトは、一八〇一年秋の『寄稿』第三分冊で、シェリングが同一性体系を構想するにあたって、バルデイリの教説を利用した (Vgl. Bayr. III. 171) とシェリングを非難し、バルデイリの先駆性を讃える。これに対しシェリングは、一八〇二年一月、ヘーゲルと共同で編集発行を始めた『哲学批判雑誌』に、「絶対的同一性体系およびこれと最近の (ラインホルトの) 二元論との関係について」(以下「関係論文」と略記) を著し、バルデイリからシェリングが剽窃したという非難に対し、先のラインホルトによるシェリング批評を逆手にとつて、同一性が以前から自分の原理であったと反論するとともに (Vgl. GW. IV. 140) 逆にバルデイリやラインホルトにあつて絶対的同一性だとされるへ思惟としての思惟が、適用されるにあつて外部に素材を前提しなければならぬことの矛盾を指摘する (Vgl. GW. IV. 167)。すなわちこれは、『差異論文』

でヘーゲルが用いた論法である (Vgl. GW. IV, 82 ff.)。そしてシェリングは、バルデイリやラインホルトの言う、限りない反復可能性としての同一性を、ヘーゲルを援用しつつ、「抽象的な悟性の同一性」(GW. IV, 147)だと非難したのである。

しかし本来、バルデイリやラインホルトの構成する同一性は、思惟と存在の同一性を意味していた。それにもかかわらずシェリングは、彼らの絶対的同一性を、へ思惟としての思惟に局限して解したのである。確かにラインホルトにあつて、同一性は説明され得ないとされていた。しかし、シェリング自身、「精神の国の永遠なる太陽」(GW. IV, 145;)と語った同一性を、知の対象ではなく信仰の対象と捉えた時、シェリングの同一性も、知ることができないという対立関係を担いながらもそれを捨象しているだけの抽象的な同一性だと、見做されなければならないだろう。しかも、バルデイリが同一性の自己超出を語った (Vgl. Gdel, 114 ff.) のに対し、シェリングはこれを否定したのである (Vgl. GW. IV, 158; Sch. III, 15)。だがヘーゲルは、「主観—客観は、意識が自己活動性によって、自らをそこへと創出できないものではない」(GW. IV, 85)とし、へ絶対的なものへの自己構成についても語っていた (Vgl. GW. IV, 91)。ヘーゲルにしてみれば、意識を絶対的な同一性へと構成するところに知が成立するのであつて、それによつてこそ初めて、シェリングの言う「自己意識の完全な歴史」(GW. IV, 142)も構成されることになると思ふたであらう。

つまり、シェリングが自ら、ラインホルトによる批評を逆手にとつて、ヘーゲルを援用しながら、自らの同一哲学の淵源を『超越論的観念論の体系』にまで遡及させることで、ラインホルトから投げかけられた、バルデイリからの剽窃疑惑に対して完膚なきまでに反論するというのが、この「関係論文」の主旨である。この論考からは、そうした思想史のドラマを読み取ることができるのである。

(ただ、バルデイリの『第一論理学綱要』は実のところ、一七九九年の九月末までに刊行されていたようなので、剽窃疑惑を振り切るには『超越論的観念論の体系』までさかのぼったところで追いつかないのも事実である。といつても、シェリングとバルデイリとは、同一性の把握においては根本的に違うのも上述の通りである。)

その他にも、シェリングがヘーゲルの『差異論文』の論点を援用したりすることによって、「著者」と「友人」との対話を織り成しているところなどを見るにつけ、二人の間にこうした会話があったのかなどと想像を逞しくできるのも、本論考の面白さである。

ドイツ語は、会話体であるのに、いや会話体ならではの難解にして晦渋を極めた。誤りの多々含まれていることを虞れるものであるが、お気づきの点があれば、何なりとご教示賜りたい。せめて、シェリングの議論が踏まえている、バルデイリの『第一論理学綱要』、それにラインホルトの『寄稿』の関連箇所については、註で訳出するよう努めた。

もともとは、今を去る四半世紀前、神戸大学大学院文化科学研究科の院生研究室で、ラインホルト研究の一環として苦しみながら訳出した旧稿である。今回、全面的に見直して一応読める程度にまで直してみた。このような困難を極める訳出に手を染めようなどと思いつた若き日の自分の渴望に呆れるというのが正直な気持ちである。もしタイムマシーンがあつて、その頃の自分に会うことができたら、「お蔭様で」と謝辞を述べるだろうか、「まだまだ頑張ってるよ、年をとるのも捨てたもんじゃない」と言うだろうか。いずれにせよ、二五年を経て陽の目を見たことを素直に喜びたい。

(栗原 隆)

二〇〇六年三月一二日